

移民の生活の歴史 (4)

ブラジル日系人の歩んだ道

半田知雄 著

ここには第11部と12部を収納



目次

(数字は原本のページ数です)

再刊のことば

1. 第1部 契約移民―金のなる木をさがして
かさ丸のサントス入港／サンパウロ移民收容所の日本移民 10
2. 「配耕」先、六農場の地理 24
3. 「配耕」と移民列車 27
4. ブラジル産業史のうえからみたコーヒー農場の地位
ブラジル産業の移り変わり／コーヒー栽培の歴史とサンパウロ州のコーヒー地帯 33
5. コーヒー農場における第一回移民 38
コロニア／ズモン農場の場合／カナアーン農場の場合／フロレスタ農場の場合／サン・マルチーニョ農場の場合／グアタパラ農場の場合／ソブラード農場の場合
6. 第一回移民の経験―いわゆる「失敗」の原因について 62
7. 第二回旅順丸移民 68
ジャタイ農場／サンタ・マリア農場／サンタンナ農場／第二回移民の成績とその後の移民輸送
8. 移民とはどういうものか―日本の近代化の下積みとなった農民たち 80
9. ファゼンダ生活の一農年(一九一二〜一九二二年) 87
年の切れ目―出るもの、はいるもの／コルション作り／はじめの食べ物／コーヒーを入れる／ファゼンダの洗濯と薪取り／鋤の柄のすげ方、その他野良仕事に必要なもの／便所のこと／仕事ははじめ―出勤風景／除草の仕事を習う／コーヒー園の食事／たばこ一服／帰宅(プラ・カーザ)／ビツシヨ・デ・ペー(砂蚤)／土曜日／斧つかいの名人／土曜の晩／日曜日／コーヒー園の間作／夜逃げのこと／ブラジルの夏／病人、葬式／パン焼きと豚殺し／日本移民の食生活／新移民とブラジル語／子供のたのしみ／ファゼンダの正月／臨時収入と不慮の欠損／作物のとり入れ／牛車の季節／山たて(コロアソン)／パトロンの農場入り／コーヒー採取(アパンニヤ)／コロノの暮らしぶり／日本人コロノの家!ファゼン

ダの人的環境／ファゼンダの組織とコロノ制度／フェスタ（祭り）の多い六月／山崩し／総勘定／エンボラ
10・一九二七年の調査にあらわれた移民の生活 163

第2部 初期移民の都会生活

- 11・サンパウロ市における初期の日本人 168
- 12・当時のサンパウロ市 178
- 13・コンデ街の生活 185
- 移民にとりつきやすい家庭労働／大工、塗工と家具商／自動車運転手／在留同胞のオアシス、コンデ街
- 14・ビッショ賭けの話 198
- 15・シネーマ 203
- 16・フロントン 206
- 17・あそび 209

第3部 独立小農への発展

- 18・独立小農と近代自作農の出現 214
- 19・自作農へのあこがれ 217
- 20・米作をめざした初期の日本人 221
- 21・日本人植民地の三つの型 224
- 22・原始林の開拓 225
- みどりの地獄
- 23・原始林開拓の先駆者 227
- 測量隊の仕事／ヤマキリ（山伐り＝森林伐採の仕事）／山焼き
- 24・新開地風景 239
- 住居／衣服／食物／あらやまの仕事
- 25・初期植民地の一年間 247
- はじめの無知／プランタデイラ／コーヒーの植付け／家づくり／衣服／食物／正月・新年宴会／綿つみ／カザメント（結婚）／天長節／ばった軍襲来
- 26・植民地の建設―入植当時の悲惨な経験 262
- 平野植民地の開拓／イタコロミー（第一上塚）植民地の創設／ビリグイ植民地／バイベンとブレジョン植民地

27. 地権問題―植民者にふりかかる人為的災難 289

第4部 植民地建設途上の諸問題

28. 植民地の自治機関と教育 296

29. 日本人会・青年会／小学校／青年の夜学

30. 移民社会における結婚 313

31. 連れ家族の悲哀 321

第5部 地方史―各植民地の歴史

32. サントスおよびジュキア線の同胞 326

33. 第一回移民と当時のサントス市／サントス市およびその周辺の邦人とその職業／ジュキア線の同胞

34. イグアツペ植民地の建設―桂、レジストロ、セツテ・バーラス 343

35. サンパウロからレジストロへの道／イグアツペ植民地という名称／桂植民地の開拓／レジストロおよびセツテ・バーラス／初期植民者の生活／産業の移り変わり／植民地夜話／現勢概覧

36. 奥モジアナ方面の米作者 365

37. 初期の人たち／米作者の特殊ないき方／二種の分益農／初期の米作法／低湿地の米作／台地の陸稲（おかば）づくり／初期の大農とその生活／ジャーナリズムに喧伝されなかつた奥モジアナ地方／イーリヤ・グランデの悲劇／冠婚葬祭／追捕

38. カンポ・グランデにおける沖縄県人の発展―第一回移民の足跡をたどって 389

39. カンポ・グランデ周辺の開拓／市外と市内の日本人／変わりつつある生活

40. サンパウロ市郊外の農業と日系農家の生活 400

41. 郊外農業のはじまり／郊外農家の生産と生活様式／元祖自慢／各集団地の歴史／当時の販売法と天秤姿の野菜売り／初期の運搬機朗とトラックの出現／貧弱な生活程度／近郊農業の特殊な例外／都会との文化交流と生活の改善

42. アリアンサ移住地の特色 416

43. 確実なる計画と秩序と統制のある組織のもとに／移住者は

出稼ぎものではなかった／先駆者の苦闘／初期入植者の生活／移住者が直面した現実／「アリアンサ」というところ／「コーヒーよりも人をつくれ」

37・ブラジル拓殖組合の創設になるチエテー移住地426
移住者の不満と事務所員の苦労／初期入植者の生活／入植者は依然として少なく……／市街地（ノーボ・オリエンテ、現ペレイラ・パレットス）の発展／漬物のおい

38・多くの障害をのりこえて建設したバストス移住地437
バストス移住地／移住地の経常方針／開拓の第一歩／植民地の動き／初期移民者の生活／満一年の保健状況／市街地
および小学校建設／十一年間の入植者家族数／失敗した土地選定法／やせ地に栄えた産業／バストス移住地の特色／植民者の精神的傾向／スポーツのバストス／郷土愛／現在のバストス市

39・旧移民の多いトレス・バールラス移住地450
トレス・バールラスとアサイー市／移住地の特色／はじめて原始林に斧をおろす／入植初年度／開拓二年目からの植民者の動き／ブラ拓の指導方針／テーラ・ローシヤ地帯の植民地

40・北パラナ（パラナ州北部）への発展462
一九三〇年以前の北パラナ／ロンドリーナ地方の開拓

第6部 全盛期の植民地（一九三〇～四〇年）

41・全盛期のコーヒー地帯472

42・初期植民地全盛時代の生活………476
植民地の気風／小パトロン気分（住居、食事）／つきあい（お産とお葬式）／新しい日本人会／青年会とスポーツ／弁論大会／巡回シネーマ／流行歌／東亜共栄圏の夢と棄民思想／ブラジル育ちは気がきかない／初期植民地崩壊のきざしと青年会の反同化的傾向／おやじたちの不満

43・地方都市の出現と発展494

ペンソンの役割／町の青年会の役割／学生寄宿舎、裁縫学校／うどん・しるこ屋／地方都市日本人の職業別／地方都市の生活

44・戦前の植民地における二世の性格512

- 45. ノロエステ線における日本人の勢力 522
- 46. 日本人はなぜ農業に執着したか 526

第7部 移民と風物

- 47. 米食と風呂 532
- 48. 日本移民の食物の特長 538
- 虫の話 542
- 草の話 550
- 初期植民地の気風 556
- オスピタリダーデ（旅人をもてなす）／相互扶助と平等主義／もののやりとり

52. ブラジルの田舎者の生活 561

住居とその内部／寝室とあかり／食生活／たばこ／入浴／洗濯／家禽、家畜、その他／作物／性格、趣味、教養／服装／女たち

第8部 移民社会の中心地サンパウロ市

- 53. 一九三三年におけるサンパウロ市の日本移民 572
- コンデ街の様相／コンセリエイロ・フルタード街／コンデ・ド・ピエヤールとイルマン・シンプリシアーナ街／ピニエイロス区

第9部 深まりゆく移民のなやみ

- 54. 二つのナシヨナリズムの間にはさまって苦しんだ移民 586
- 55. ナシオナリザソンと外国語出版物（とくに新聞）の発行禁止 590
- 56. 新聞と、その果たした役割 594
- はじめての新聞、週刊『南米』／『日伯新聞』の出現／『伯刺西爾時報』の登場と「日伯」／その他の新聞／「日伯」
- 「時報」の対立時代／新聞の果たした役割／各新聞の特色
- 57. 一九三三年から四一年末まで 609
- 移民二十五周年祭／移民二分制限法／ポルトガル語のできない教師は日本語を教える資格がない／十四歳以下の児童

に対する外国語教授の禁止令／日語教師の生活は苦しかった／だが親孝行を教えるか／ただ悶々として／かくれて教えなくても効果はあがらない／二世教師は植民地で孤立した／早く同化した二世とその親たち／二世の自覚のはじまり／サンパウロ市の日系インテリ青年たち／ヨーロッパ戦争と深まりゆく移民のなやみ／一喜一憂の時代／世の中一般が変わっていく／枢軸国民は敵国人／一九四一年、戦前最後の年

58・太平洋戦争中の在伯同胞 付―戦争中の日本移民の心理状態 625

第10部 戦後の混乱と新しい生活への歩み

59・終戦直後における同胞社会の空気 644
あるサロンでの会話／デマはどうして流されたか／計画的な陰謀も片鱗をみせる／「公報」を待つ心理

60・混沌たるコロナの状況 649

カンポス・エリーゼオス宮の説得／オズワルド・クルースの暴動／終戦一周年／郵便再開／邦字新聞の再刊／永久帰国者の出現

61・テロ事件とその犠牲者 660

62・ブラジル人側に残された資料による臣連事件の理解

664

臣連事件に対するブラジル人の態度／ブラジルの新聞に見る臣連本部と臣連実践綱領／デマ宣伝と偽造写真、その他／脅迫行為のいろいろ／各地指導者の臣連理解／偏執狂的頭脳の指導者たち

63・戦後コロナの対立抗争はどのように解釈されたか

677

64・建設への道 680

65・「涯しなき思想旋風を衝いて」―終戦後七年の信念派の理論 685

66・人種的偏見のない明るさ 691

追補 日本移民の人種的差別観

67・一世青年と異人種間の結婚 698

68・「新来」と「ブラジル・ボケ」 700

69・二世と日本文化―逆効果をもたらした教育 704

70. 日本移民の宗教生活 710

第11部 コロニア統一への動き (数字は文庫のページ数です)

- 71. 戦災同胞救援運動 9
- 72. トビ魚一行の訪伯―涙で仰ぐ日章旗 19
- 73. サンパウロ市創立四百年祭への協力運動 23
- 日本館のにぎわい／日本美術紹介としての役割
- 74. サンパウロ日本文化協会の創立 35

第12部 コロニアの現状

- 75. 戦後移民の渡伯 付―日本の企業進出 41
- 76. 一九六七年五月の皇太子夫妻歓迎について 54
- 77. 現代の奥地シチアンテ (北パラナ同胞の現状) 66
 - ロンドリーナ市のスケッチ／農村をのぞく／シチアンテの生産様式 (過去)／シチアンテの生産様式 (現在)／奥地の非コーヒー地帯／今後の行き方に対する諸問題／二世の成長とその教育／二世の政治運動／二世の結婚問題／世代の差と教養のへだたり／寺院、盆おどり、その他いろいろな「会」／冠婚葬祭／家庭生活／最後に、さらに奥地の町を
- 78. 単一性から多様性への発展 108
 - 二世が大きくなって／土地がやせて／勝ち負けの争いもあって／教育の目標もかわって／自由な選択ができて／階層の分化もおこって／社会的地位の入れかわりもおこって／新しい方向への動きもあって／発展の意味もかわって／発展のための必然的多様化
- 79. エピローグ 115

用語解説

119

参考文献

129

第11部

コロニア統一への動き

71 戦災同胞救援運動

一九四七年三月といえば、やっと臣連テロがおさまつて、コロニアにもいづらか気持ちのゆとりができればはじめたときであつた。

この月の二十九日、有志十八名が、もと海興支店長宮腰千葉太宅に集まつて、かねてから懸案となつていた母国戦災者の救援運動をはじめめるための組織をつくることになつた。

この会合によつてきまつたことは、ブラジル赤十字社の認可のもとに、リオに本部をおき、サンパウロはその支部とし、団体名は「日本戦災同胞救援会」Comite de Socorro do Vitima de Guerra do Japaoとよんで、募金運動をおこすこと、そして集まつた金は、米国サン・フランシスコ

市の「日本難民救済会」または「友愛奉仕団」におくって救済物資を購入し、LARA（国連救済復興委員会）の手を経て、日本へ送ることであった。

かくて四月十六日、赤十字社の許可を得て、さっそく準備にとりかかり、六月ころからサンパウロ支部が中心となつて、各地と相呼応し活発な募金運動を展開した。「一日、ミル抛金」「月掛抛金」「小学生献金」などの活動がそれであった。そして、八月中旬にはサンパウロ支部は、第一回救援物資一万五、〇〇〇ドルを送るまでにこぎつけた。ブラジル同胞から「愛の贈りもの」としてはじめて日本に送られ感謝されたものは、粉ミルク二万五、〇〇〇ポンド（一万ドル）、うどん四万五、〇〇〇ポンド（五、〇〇〇ドル）であった。

だが、こうした募金運動は、決してスムーズに行なわれたものではなかった。むろん「勝組」と目された人々のなかにも、この運動にはだまって救援の手をさしのべたものも少なくなかったが、「敗戦派」の仕事だというので、白眼視したり、なにか不正でもありはしないかというので、赤十字社に対してさぐりを入れるものなどもあって、募金運動を妨害した。新聞社のなかでも、戦勝組のなかに地盤をもったものは「社の行き方と相違する」との理由で救援運動に参加することを拒否したものもあつた。

こうした困難のなかにも、各地委員会では、「音楽と舞

踊の夕」「救援バイレ」「子供の会」等の催しで資金集めに努力した。

この運動は一九五〇年七月二十九日、救援会が解散されて残務整理が終わるまでの三年六か月の間に、資金五七一万七、三四九クルゼイロを集め、一九五〇年四月からはケア（欧州救済共同団体）を通じて救援物資を日本へ送ることができた。

このほか、個人あての慰問小包のとりあつかいがあった。はじめは救援会の仕事であったが、手数料をとっての仕事は赤十字社関係のものとしてふさわしくないという注意があったので個人の名義にかえたが、この手数料はいぜんとして救援会の運動費にあてられた。

救援運動は、戦災犠牲者に対する同情心に基づくものであったことはもちろんであるが、その他に「遠く祖国をはなれていて、国難に際しなにもできなかつた自分たちはいまこそ御奉公できるときだ」という気持ちによつてささえられたところも多かつた。しかし、あくまで「戦勝日本」を信じていたものは、「敗戦どものやるまやかしかもの」として参加を拒否した。救援の手をのべたものは在伯同胞推定五万家族のうち五千家族ほどであつて、その一割にすぎなかつた。だから、「戦災同胞救援」の名によつて、同胞社会における対立の幾分かを緩和しようとした

意図は、全く実現されなかったわけではなかったが、九割の同胞は、いぜんとして結合をみなかったことになる。

救援運動に参加しなかった人たちの気持ちはなかなか複雑であるが、左にその一例をあげてみよう。

「あれは敗戦、これは強硬（勝組）と、色分けして対立し抗争し、それでいて日本精神の理論を説き、或いは祖国への救援運動を為したところで、祖国日本に「が」在伯同胞社会の實際を察知しているとしたならば、果してどのような感じを祖国の同胞に与えることでありましょうか？

物を与えることによつて、上辺丈（うわべだけ）同胞愛を見せようとしても内なる虚栄心がありますならば、日ならずしてその醜（みにく）さを暴露されるでありますように。口に同胞愛を唱え、物資を送つて同胞を物的に救おうとしましても、心の底に反皇室中心の思想を蔵していて、果して真に血を分けた兄弟たちを喜ばせ、救うことが出来るでしょうか」（『断』一九四八年七月三十日、七、八月合併号、三二ページ、筆者南国生、原文旧かなづかい）

すなわち、反皇室中心主義と目されていた認識組が救援運動をおこし、戦災同胞を救おうとしても、それは意味をなさないではないか、ということであった。では、彼らはその「真心」から別個に救済運動をおこしたかといふと、それはついにみられなかった。しかし、個人で慰問小包を送る道はひらけていたから、その方面から身内の者

に送られたにらがいなかった。そして、これは案外、彼らの精神に大きな影響を与えることになったようである。

さて、救援運動は、認識運動以後の同胞間におけるさらに広い組織的活動であったため、なんとかしてコロニアの連絡機関として存続させたいという意見もあったがこの時代は、まだそこまで、同胞社会の結合は発展する基盤をもたず、その間に、一九五〇年十一月の「国民前衛隊事件」で勝組残党を利用した帰国詐欺事件があつて世の中をさわがせたし、一九五四年には「贗朝香宮事件」もおこるのであるが、五二年からはサンパウロ創設四百年祭（一九五四年）の記念祭典へ各国コロニアから参加がきまつて、再び団結の気運が動くのを待たなければならなかった。

注

（1）参考書は『コロニア戦後十年史』一九五六年十二月、パウリスタ新聞社発行。

72 トビ魚一行の訪伯

——涙で仰ぐ日章旗

母国戦災同胞救援運動がようやく終わりに近づいた九五〇年三月、古橋広之進一行の水上選手団「トビ魚」の来伯は、戦後のコロニアの大きな出来事として記録されねばならない。

「トビ魚日本を発つ！ これほどよろこびにみちた朗報は、終戦後、否、コロニア移民史はじまって以来のことといっても過言ではなかった。事実、それから五日目の三月四日午前、聖市コンゴニア（ス）空港に選手たちが元気な姿をあらわしたときには、無慮六千をかぞえた邦人大衆が、一瞬に、どつと彼らをとりまき、彼らの雄雄しい姿をみて感激に眼をうるませ、又各自の胸に誇らしくとめられた鮮かな日の丸のマークに、人波は感激と興奮の最高潮に達したのであった。この熱狂する同胞の姿は選手団一行に深い感銘を与えた。いたいけな少女が日伯国旗をささげた姿、老の身の腰を伸して迎える老人、空港初めての人波は、一行をとりまき、つきまとって離れようともしなかった——」

これは雑誌『よみもの』の記事「燦たり日伯親善の金字塔」のかきだしであるが、このみじかい文章のなかに当時の在伯同胞の感激がもれなく語られているように思える。

六千をこえる邦人大衆が出迎えたとあるが、戦争中はすべての集会在禁じられ、街上で日本語を話してさえも、警察へ引っぱられるような息苦しい時代をすごし、戦後は勝った、負けたのあらそいで血をながし、自ら新時代の明るさをおおいかくして暗黒のなかに暮らしてきた同胞たちであつた。そのために、戦災同胞救援運動も暗礁にのりあげていきなやんだのであつた。だがそうした苦悩も、つまるところは祖国の運命に対する異常な関心によるものであつて、そこにかくされた「郷愁」の深さは、移民以外のものには、おそらく想像もつかないものであつたろう。それは、この記事によつてもわかるように選手たち「各自の胸に誇らしくとめられた鮮かな日の丸のマークに、人は感激と興奮の最高潮に達した」ほどであつた。その小さな「日の丸」こそ、移民たちの暗くとざされた心に、東天の旭日のように輝きを与えるものであつた。

遊佐正憲監督にひきいられたトビ魚たちは主将村山修一につづく古橋広之進、橋爪四郎、浜口喜博の一行五人であつた。ブラジル側の人気もすばらしいもので「各新聞は連日紙面一杯のスペースを割いて、大々的に選手の動静を報じ、ことに監督、選手の一体となつたその練習ぶりに驚嘆、古橋はいかにして世界記録を樹立したかと、彼の泳法を細々（こまごま）と研究するなど、スポーツ界の関心をこの一点に集めたかの感があつた」記念すべき感激の

シーンは三月二十三日午後八時、サンパウロ市パカエンブー競技場で展開された。この夜、スタンドは文字どおり立錐の余地もなく観客にみたされたが、大半は日系人であった。

九時、スタンドの一隅にわきおこる楽、州警兵のバンドだ。それにつれてアデマール州知事夫妻の臨場、ここに歴史的な第十七回全伯水上選手権大会の幕は切っておとされた。

紺色のユニフォーム姿で日本選手団があらわれるや、場を圧する万雷の拍手、斎藤巍洋盃（2）を捧げる鈴木（威）委員代表を先頭に、遊佐監督、村山主将につづく三選手、胸の日伯両国旗のマークが目にしみる。荘重なマーチに歩調を合わして、軽快な足どりでミナス、南大河、リオ、最後にサンパウロチームがプールをまわって整列する。

清澄なプールの面は照明に緑を増して静まってはいたが、折からの谷をどよもす拍手の音に正に波立つとさえみえる。

州知事が主檣（メインマスト）のもとに立つ。

りようりようと勇壮なブラジル国歌の旋律とともに、全員起立の静寂のなかに徐々にブラジル国旗が州知事の手によってたぐられ、拍手の嵐にひらひらとはためく。伯国旗がかかけられ、場内が寂とした次ぎの瞬間、再び州

知事の手は、マスト左側の日章旗をたぐり始めた。折から「君が代」の吹奏、おお幾年ぶりできくなつかしい「君が代」だ、ゆるやかに、そして強くパカエンブーの谷の夜の静寂に流れていく。ああ、この一瞬、数千の観衆の胸をさき肺腑をえぐって身のすみずみまでしみこんでいく「君が代」、懐かしさが、嬉しさが、下から下からこみあげてくる。その中を日章旗があがる。夜空にもあざやかに日の丸が揚る。

「いま、日本国旗が掲揚されている。彼ら在伯日本人達にとって、実に十年ぶりである。プールにある日本人達は深い感激と感銘につつまれてみな涙しているようだ」——電波は、これも他人ごとならず感激、興奮したラジオ・アナウンサーの声だ。

場内のあちこちにすすり泣く同胞の声が聞こえる。選手たちもいならば伯人たちも、この大いなる瞬間の嵐のなかに一つになってとけこんでいる。そこには国籍もなく、民族のちがいないもない。人間として至上の感情をたがいに感じあっているのだ。伯国人が抱くコロニアへの暖かい気持ちが大きく包んでいる。

「いいねえ、君たちの国旗があがって……」と。トビ魚一行がもたらした偉大な日伯交歓図である。

あがる「日の丸」を仰いでやや呆然自失の態の邦人をめざますように拍手の嵐が伯人側からおこった。ついで聖

州旗があげられた。

劇的な入場式が終わり、日本選手は遊佐監督をはじめつぎつぎに中央のスタート台に迎えられ観衆に紹介されたが、その都度拍手をもつてこたえる。謙虚な態度で観衆に頭をさげる選手たちの姿は好もしく印象的である。

五人とも伯人選手に伍して遜色のない堂々とした体躯だ。

この大会はむろん、全伯選手権大会であったから、日本選手は、特別の番外出場であった。ただし、日系選手サンパウロ軍のテツオ・オカモト（岡本哲夫、十六歳）がこの夜、四〇〇メートル自由形を五分八秒五で泳ぎ、ブラジル選手権を獲得したことは大きな収穫であった。

大会第二夜は、日本選手のデモンストレーションで、浜口が一〇〇、村山が二〇〇、古橋が四〇〇、橋爪が八〇〇メートルを泳いだ。

三日目は、はじめての昼間競泳。日本選手出場の種目は、八〇〇と八〇〇リレーだった。リレーのほうの日本チームは六番コースで、浜口、橋爪、村山、古橋の順。最後に古橋がタッチして八分五十九秒六。このとき第二位にはいったのがサンパウロ軍。オカモト少年が最後にねばった。むろん、大会のリレー第一位となってサンパウロ軍の勝利となる。

四日目、年後三時、試合がはじまるころは満員で切符売り場がしまってしまった。しめだしをくつた三千名をこ

える人々は、裏の丘にはいあがるもの、警官の阻止もきかず、建築中のビルへ乗りこむもの、付近の街路樹も人間で鈴なりとなった。

この日、オカモトは二〇〇メートルを二分十七秒一で大会新記録を樹立。好敵手アラン・ボゴシアンは二分十七秒七のタイムでともに大会の新記録であった。

本日のよびものは、一五〇〇メートル。ブラジル側では長距離の古豪アンテノール・フェレイラと新鋭のジョン・ゴンサルベス少年が張りあう。

古橋 十九分二十三秒八。

橋爪 十九分二十五秒二。

ゴンサルベス少年は覇者アンテノールをやぶって大会新記録をつくる。

最後は四〇〇メートル・リレー。四日間を通じて、初めての日伯接戦。

日本側は村山、橋爪、古橋、浜口。

サンパウロ側は、カツンダ、オットー、プラウド、オカモトの順。

一着日本、二着サンパウロ、つぎはリオという順。大会におけるサンパウロ軍の勝利がここできまる。サンパウロ水連会長が選手たちに胴あげされ、着服のままプールに放りこまれる。感きわまつてのいたずら。やがて「斎藤巍洋盃は、リオ・チーム打倒の宿望を達した聖州軍に授与

され、この歴史的大会に輝かしい足跡をきざみこんだ。日本水上団一行は水連会長より記念メダルを贈呈され、めでたく大会の幕は閉じた」のであった。

二十九日は飛行機で、日本移民の歴史にわすれられないモジアナの「古都」リベイロン・プレットへ飛んだ。ここでもサンパウロにおとらない感激の同胞たちに迎えられた。

午後四時選手団がプールの下見をかねて練習にでかけたころは、切符はすでに売り切れ、入場できなくなった同胞が七、八百もいて、せめて練習ぶりだけでもというので、クラブの関係者に交渉した結果入場を許され、練習をみせてもらった。この人情ある処置をきいて感謝しないものはなかった。大会の開幕は午後八時半であった。リベイロン・プレットでは、すでに全伯大会のあとであったので、初の日伯対抗試合ということであった。

ここでも入場式にはブラジル国歌とともに君が代が吹奏された。みな肅然と襟をただし静かに唱和するものもいて、息づまるような一瞬。つづく拍手の嵐にわれにかえった同胞たちは涙の頬をあげ、競技の開始をしるのであった。

かくて、リベイロン・プレット大会でも、「世界記録の更新は」なかったとはいえ「上乘の記録を樹立し」夜は日伯合同の大歓迎会にのぞんだのであった。

四月一日の夜はマリリア。

二千数百を収容する新造ヤーラ・クラブのスタンドに、すきまもなくつまったのは、ほとんど日系人、パウリスダ、ノロエステ、ソロカバナ、その他州外地パラナから集まった人たちだ。トラックに満載、数百キロをとばしてきたものもめずらしくない。

この日の最後の種目八〇〇メートルリレーこそいちばん期待されたものであった。出場チームは、日本、サンパウロ、リオの選手たち。

競泳が終わり、発表された記録は日本選手の八分四十分六の世界新記録であった。選手たちはだきあってよろこんだ。

「待望の世界記録は遂に生れた。コロエア四十万の熱望はここにむくいられ、四十年の移民史の中で、最も輝かしく、誇らしい時が訪れたのだった。遊佐監督が、『皆さんの期待に添うことができて本望です。選手たちも私にも、こんなうれしいことはありません』といていたのもさこそとうなずかれる」と『よみもの』の記者は書いている。

大会二日目は前日と同じく午後九時から。よびものは四〇〇メートル自由形、古橋が四分三十二秒六、これも世界新記録であった。

「二つの世界記録を生んだマリリアの名は、一路電波に

のって世界中になりひびいた。幸福の都市マリリア！この日を永久に記念するため、ヤーラ・クラブの庭園には、トビ魚たちによって記念樹がうえられた。世界記録の『樹』つつじと椿は、来る年も来る年も、この日を祝して美しい花を咲かせ、マリリアの人たちに、さっそうとした日本水上団の姿をいつまでも思いださせるだろう」

『よみもの』記者は、このように書いて感激のレポ記事を結んでいる。

マリリアこそ、かつては臣連運動の中心地、世の恐怖のもとであった。それだけに、日本に対する関心もつよかったといえる。コロニアの平和のためにも水上選手団の訪伯は絶大な意義があった。共に活躍した岡本少年によって、サンパウロが全伯選手権大会の第一位になったことも手伝い、二世たちに与えた好影響も大きかった。

「なんともいえない力強さと頼もしさに、ああ私たちの父母の国は大丈夫だという強いかんじをうけました」とある二世嬢は、トビ魚感想文のなかに書いている（『よみもの』一六八ページ）。

注

(1) 『よみもの』一九五〇年四月二十日、日本陸上選手来伯記念号、一九二〜一九三ページ。

(2) 斎藤巍洋は往年のオリンピックピック選手で戦前ブラジル海

軍省の水泳コーチとして招聘されていた人。戦争中もこの人のおかげで、在伯同胞に対する海軍軍人の好感は失われなかったという。鈴木威氏談。

73 サンパウロ市

創立四百年祭への協力運動

サンパウロ市は一五五四年一月二十五日、今日、パテオ・デ・コレージオ（学校の庭）とよばれるピラチニングの丘上に、僧アンシエッタによって設立された。一九五四年は四百年目にあたるのである。

ブラジルの発展は、十七世紀ころまでは、北東地方の砂糖生産によってささえられていたが、以後はミナスの金となり、十九世紀後半にはリオ・デ・ジャネイロからサンパウロ州のコーヒーへと移ってきたことは、ブラジル産業史のところ、すでに述べたとおりである。

今日、サンパウロ州を除外してブラジルを語ることはできない。その州の中心となっているサンパウロ市の創立四百年祭は、ブラジルの経済力をなうサンパウロ州の記念すべき祭典と考えられた。そして、祭典はサンパウロ市を中心として行なわれることになり、一九五一年十二月市令によって「サンパウロ市四百年祭典委員会」がもうけられ、委員会からは州内の各国コロニアと、その本国

政府に対して祭典および行事への参加を求めることになったのである。

だが、わがコロニアには、当時まだ中心機関がなかった。戦後のごたごたはまだおさまっていないかった。すでに国交は回復していたが、総領事館がイニシアチーブをとるには、コロニアは総領事館とのつながりを欠き、まだその足なみはそろっていないかった。いな、戦前の日本官憲中心の移民社会は、すでに大きく転換して、コロニアは二世の政界進出もあつて、ブラジル社会へとけこむ前提として、コロニアそれ自身を中心に動きはじめていたのである。総領事館は、戦前のように「日本帝国の代表」として、在留民に対し号令をかける権威を失っていた。だれ一人祭典参加のイニシアチーブをとるものがなく、いたずらに約半年はすぎたのであつた。

五二年の五月、すでに各国コロニアの祭典協力のごたごたが伝えられるにおよんで、当時資産凍結解除（五〇年十一月）後、やっと再活動にはいろいろとしていた「東山」の本喜誉司は「单身、時の総領事石黒四郎を訪問して四百年祭の意義とコロニア参加の必要性を説き、総領事からイニシアチーブをとるように要望した」のであつた。

こうして、石黒総領事もやっとみこしをあげることに決心すると、コロニアの有志十数名をマツピン食堂にまねいて、六月二十三日第一回相談会をひらいた。このとき

の出席者は、総領事館側からは石黒総領事、野崎領事、平田弁護士（二世）、コロニア側からは山本喜誉司、下元健吉、羽瀬作良、加藤好之、田村幸重（二世）等だけで、欠席者が多く、なんらの結論もせずに散会した。この第一回相談会が、総領事のお声がかりにもかかわらず、欠席者が多かつたことは、当時のコロニアの情勢の反映したものであり、早くも「コロニアの参加体制の確立のむずかしさを一般に印象づけた（2）」。

すなわち、十数名の招待者で、出席したものは半数以下の五人、しかも、ここで注意すべきことは、戦前には例をみなかった、二世の一州議員が出席していることであつた。

さらに、この第一回相談会で注目されたことは、その田村議員が、私案として、一、各州の首都に一校ずつの小学校を建設する、二、教会を建設する、三、社会事業施設の設置、などをだしたことである。すなわち、一世側の出席者が半数にもみならず、「案」らしいものも持たずに出席しているに反し、二世代議士のほうでは、すでにこうした「私案」をひっさげて相談会にのぞんだことは、コロニアの動きに戦前とはちがった変化があらわれたことを示した。しかも、田村州議のその後の動きは多くの一世の意表にでるものであつた。

「こえて、二十六日、石黒総領事はコロニア八新聞（3）」

の代表者を公邸に招集して、協力を求め『各社から推薦された人をもって準備委員としたい』との腹案をうちあけ、これに新聞代表も賛成し三十三名を推薦した。総領事はのちこれら委員と個別に会見、就任を求める一方、意見を交換した（４）」ほどであって、この慎重さは、いかに当時のコロニアが混沌とした状態にあったかを物語っている。

やがて、八月二十二日には、準備委員に推薦された人たちの会合がひらかれたが「この日、第一回相談会に『私案』を強くうちだした田村州議は、ドン・パウロ司教、ギード、ボニアフアシオ両神父とともに出席し『委員長には司教を推薦したい』との動議を提出した（５）」。こうした思いがけない田村州議のやり口は準備委員をおどろかせるに充分であった。

当日の会議は、四百年祭の趣旨説明や役員の選考、事業および資金捻出についての相談であったが、幹事として、下元健吉、破魔六郎、中尾熊喜、鈴木威、木原暢の五人が総領事から推薦されただけであった。

こうして、その日は田村州議の私案とは別に準備をすすめはしたが、かつて石黒総領事は四百年祭のコロニアの協力について「祭典参加はコロニアの記念事業で、政治的宗教的色彩は排除する」と言明してあったにもかかわらず、第二回の単なる準備委員会とみなされた会合に司

教ほか二神父が出席したこと、さらに田村州議が司教を委員長に推薦したことなどは委員会の準備進行上の障害となりだした。

ちようどそのやさき、九月十二日、突然ガルセース知事は、小学校ならびに教会建設案に対する日本人コロニアへの鄭重な感謝状を送り、これが翌十三日のポ字紙および日伯毎日新聞に発表されるにおよんで、コロニアは愕然として色を失った（6）。

こうしたいきさつがあつたため、はじめの幹事会の総辞職となり、あらたに、山本喜誉司、粟津金六、武田俊男の三人がえらばれることになった。かくて、十二月八日の創立総会では山本の知恵と周到な準備のもとに今度は一瀉千里のいきおいで聖市四百年祭典日本人協力会が生まれるのであつた。

しかし、田村代議士の運動は、これで終わったものではなく、五三年にはいると、別個に「聖市四百年祭並に日本移民渡伯五十周年事業」に対する委員会を結成し、「各州に一つずつの小学校、聖市にサン・フランシスコ・シヤビエル教会建立地鎮祭」を举行することを各新聞に一ペーシ大の広告をだし、また各所にポスターをはりだすことなどもあって、コロニアの祭典参加運動は二つに別れるような動きをみせた。だが、協力会の動きが盛んになるにつれて、この計画は一時見あわせの形となってコロニア

の祭典協力への運動は一本化したのであるが、こうした紛糾は「そのまま戦後コロニアの縮図ともいえるもの（7）」であったと「戦後十年史」の記者は評しているが、移民社会が、「在伯同胞」あるいは「邦人社会」とよばれた時代から、別個の意識をもつ二世を含めた日系人社会（コロニア・ジャポネーザ）となった今日、一世移民たちとはちがった考えのもとに、一元的なものから、多元的な動きをする十分な可能性のあることを示すもので、「田村代議士が祭典協力をおのが政治運動に利用せんとした」と個人的な非難だけですまされる問題ではなかったろう。だから、総領事が「贈物をうける側にたつ州代議士を準備委員会に招待した」ことが問題にされたことにも理由があったわけである。

ここでは協力がいかにしばしば難問題にいきあたり、山本会長がいかに苦境をきりぬけるために努力したかは、『コロニア戦後十年史』および『サンパウロ四百年祭』の記述にまかせて、とにかく、全ブラジル日系人四万五千家族の寄付応募者を見、イビラプエーラ公園内に、日本館、展示館および日本庭園を完成して、めでたく祭典協力の任をはたしたことは戦後はじめての大成果であったといえる。

もちろん、四百年祭の記念事業が大成果として遂行されたのは、コロニアだけの力によるものではなかった。

山本会長が自費で日本へ乗りこみ、朝野の名士とはかり、時の吉田首相とも懇談して日伯中央協会を祭典委員会の日本代行機関とするまでにこぎつけ、多くの協力者をえたことは、ここに書きもらすわけにはいかない。そして日本館の建設および、日本美術の紹介にあたって、日本側の果たした役割には絶大なものがあつたこともわすれることができないだろう。

さらに、サンパウロ市で当時一千と呼称されていた「洗染業者組合」、百八十人のビアジャンテ・クラブ（セールスマン・クラブ）などが募金運動に協力したこと、またこうした動きとともに「勝組」とみなされていたような個人や団体が協力の手をさしのべてきたことも大きな力であつた。

日本館のにぎわい

移民の郷愁をいやす

「新しい木の香り」

一九五四年五月三十日（日）午前十時半イビラプエーラ公園内池のほとりに予定された日本館の上棟式が催されることになった。「この日空清く澄み、日本館の屋上高く、古式の神垣（かみがき）弓矢、幣束がたちならび、榊

の緑が五月の薫風にゆれ、かもじは長く尾を曳いて、ゆるやかな流れを見せた。灰黒色の一文字瓦は、陽に映えて痛く眼に滲み、新しい木の香が鼻をついて、新鮮の気を漂わせた。玄関に作られた祭壇の中央には、丸鏡の御神体を奉じ、榊と幣束に三方を囲まれて、その前に神酒、大鯛、果物などが三宝に乗せて捧げられた。垂一つない庭には、白砂を敷きつめ、俗鹿を超えた神域を彷彿とさせる準備が整えられた。午前十時、早くも二千人の人が押し寄せた。この豪華な日本館の材木、巨石、畳、襖などに手を押し当てる、日本の香を偲ぶ老若の群が感激の臉をうるませ、すすりあげる光景が、そこそこに見出された（8）。

午前十時半、いよいよ上棟式の合図の鐘が鳴りわたって、開会は宣せられ、神事がはじまる。

降神（かみをまねき）、献饌（そなえものをささげ）、祝詞（のりとをあげ）、玉串奉奠（たまぐしをささげる）の儀式があつてのち、撒饌（そなえものをささげ）、閉会となる。

十年、数十年異国にあつて、久方ぶりにみるおごそかな神事に、二千の参衆はみな息をつまらせる。

あとでもちまきがあつたが、子供たちには係員から記念のもらが一個ずつ手渡された。

落成式は、八月十五日に内祝いがあつたが、正式には九月六日午後四時十五分であつた。

「ガルセース州知事を迎えて、いよいよ日本館公式落成式が挙行された。庭前の鯉のぼりは風を学んで大空に泳ぎ、午後の陽ざしはまぶしく歓迎の人垣を照りつけた。

やがて軍楽隊の吹奏裡に、山本会長の先導で知事夫妻が入場し、ギリエルメ・デ・アルメイダ総裁（9）、ジョゼー・バルボーザ・デ・アルメイダ委員、ラウル・デ・トレード渉外部長、ワルデマール・ロドリゲス・アルベス展示部長、ウイリアム・サレン市会議長代理などが後に続き、千葉総領事、協力会委員が玄関に出迎えた。場内を一巡して、廻廊、茶室、床の間、或は御輿、五重塔（模型）など日本建築の美に嘆声を放った一行は、本館に立戻り、ミス・コロナアの接待で東麒麟（10）の祝盃をあげ、粟津副会長の挨拶の後、州知事は、『日本人コロナアが四百年を記念するため、このような美しい心の寵った贈物を、サンパウロ市に残して頂くことは、州知事として心から感謝に堪えない』と謝辞を述べ、ギリエルメ・デ・アルメイダ総裁は、『各国コロナアに率先して、熱心に祭典事業を推進し、しかもこの見事な日本建築を、この地に永久に残して頂くことは、独りパウリスタ市民としてのみならず、ブラジル国民として感謝申上げたい。今後この日本館が日伯文化の交流に寄与することを、心から念願して止まない』と挨拶を述べた。

茶室では琴、三味線の合奏で花柳流の日本舞踊を紹介して興を添え、一行は午後五時半引揚げた」

こうして、サンパウロ市創立四百年祭記念万国博覧會会場イビラプエーラ公園内の日本館は公開されたのであった。

そして、付属展示館においては、ほとんど一か月ごとに、つぎつぎと日本美術品の展示会を新たにし、また、一九五四年十二月十八日から翌五五年の一月二日まで、毎土、日曜には、日本祭の週間（六日間）をつづけて、おみこしをかつぎまわったり、民謡おどりを催してにぎわった。

ちなみに、日本館の入場者は、閉会まで二十四万に達し、一日最高七千をこえたこともあった。かくて、一九五五年十月十六日、約一か年もの催しを終わって、年後一時館内において協力会解散記念会がひらかれ、最後の幕はおろされたのであった。

日本美術紹介としての役割

四百年祭典における日本館の紹介が、一般ブラジル人にどのような反響を与えたかを、客観的資料によつてここに記録することはできないが、ブラジルの建築家たちが、みな熱心にみたことは事実であった。庭園もかなり興味を与えた。あの催しがあつてから、日本式を加味した住

宅、あるいは日本式庭園をつくりたいがひきうけてくれるかどうか、という相談をうけた日本人建築家や造庭家が多かったことでも、一般のブラジル人が相当興味をもったことがわかる。

しかし、なんといってもいちばんよろこんだのは一世移民たちであって、新しい木の香に酔い、また簡素な日本美をみて、日本人の好みとはこうしたものであったか、とあらためて考えたものが多かったようである。それなら、二世たちはどうであったか。むしろ建築や造庭の専門家たちには、参考になる点が多かったにらがないが、それ以外の素人には、あの広大なイビラプエーラの環境のなかで、しかも、おしあいへしあう人ごみでながめたものは、木造の清楚さつつましい量感には、素直に感動することができなかつたようである。だから、これを父母の国の芸術として、ブラジル人に対して説明する勇氣は与えられなかつたようである。

むしろ、展示館のほうの美術展覧会では、ちがった環境のなかで特殊な感をうけるといえることがなかつたためか、もっと素直にみられたようである。日本の伝統的な建築美なども、写真ではみな感心していた。陶器も人形もよろこんでみていた。

展示館の主任として九か月をつとめた筆者は、美術品がいかにみるものの立場や環境によって、ちがったもの

に感じられるかを痛感した。

お茶などでもそうであるが、無心に茶をたてている人以外は、あの異質（ブラジルとはちがった）な環境に投入することはできなかつたようである。

東西文化の交流ということとは、形式的、技術的なものは早くとり入れられるとしても、その精神を伝えることは、いかにむずかしいかが思われた。エキゾチズムとして興味を与えることだけはやさいしのであるが……。伊勢神宮の美しさも、あの五十鈴の森のなかでこそ味わえるのであって、あの建築を環境からひきはなしては意味がなくなるだろう。

注

- (1) 『コロニア戦後十年史』四一ページ。
- (2) 同上。
- (3) パウリスタ新聞、伯刺西爾時報、南米時事、昭和新聞、サンパウロ新聞、ブラジル中外新聞、パラナ新聞、サンパウロ・マガジン。
- (4) 『コロニア戦後十年史』四一ページ
- (5) 同上。
- (6) 『サンパウロ四百年祭』六八ページ
- (7) 『コロニア戦後十年史』四二ページ

(8) 『サンパウロ四百年祭』一二八ページ

(9) フランシスコ・マタラーズ・ソブリンニョ氏の後任

(10) ブラジル製日本酒の名。

(11) 『サンパウロ四百年祭』一五二ページ。

74 サンパウロ日本文化協会の創立

日本人が三人集まれば会をつくる、と一口話にもあるように、戦前においては、日本人の集団地で日本人会のないところはまずなかった。そして、どんな小さな会でも、会長、会計、学務員は欠かせなかった。なぜなら、会の目的は会員の「相互親睦」と「子弟の教育」が最大のものだったからである。親睦とは、集まって飲み食いすることであり、子弟教育とは、日本語学校をたて、先生をやとってくることであった。

ところで、先生の給料は村の費用でまかなうとしても校舎建設には、領事館の補助をあおぐのがいちばん早道であった。会長のいちばん大きな仕事は、領事館と折衝して補助金をせしめることであった。会長自ら領事館へ出頭して、植民地の事情を述べ、領事館の人たちに顔を売る。総領事、領事様方の地方巡回にあたっては、駅へ出迎え植民地へお連れ申す。かくて在伯同胞社会は総領事館を中心

に統一され、つねにうって一丸となることができたのであった。

だが、戦争直前から日本人会はなくなり、日本語学校は閉められていたので、戦後の同胞社会には領事館を中心とした在伯同胞的結合はなくなっていた。それに、勝組、負組のあらいがながいあいだ分裂をもたらしした。二世は大人になって、ブラジル人の社会に進出していった。「在留民」は「日系人」として、二、三世をふくめて総称されるようになり、在伯同胞社会はコロエア・ジャポネーザの略称として、コロニアとよばれるようになった。

だが、一世の生活と意識とは、まだ分裂したままのコロエアを、そのままみすごすことはできなかつた。戦後八つもでたという邦字新聞は、読者を一世移民においていたし、商業や金融機関も、コロニア内部の相互連絡を必要としていた。また国交回復とともに日本との関係もひらけて、「在留民」と日本とを連結する総領事館のためにも、コロニアの分裂は好ましいものではなかつた。

一世移民の意識としても、このままブラジル人の社会にとけこんでいってしまうにはなんとなく心のこりがした。まだまだやりのこした仕事があるように思えた。移民の足跡をあきらかにするためには、ただ経済的な発展だけでいいのか、子孫がブラジル人として幸福に生活できさえすれば、移住の意義はまっとうされるのか。こうした民

族意識のもとに、戦後いち早く開始されたのは、力行会員を中心とした「学生会館」建設運動であった。

また、終戦直後におこった「日本戦災救援会」の活動も、在留同胞の連絡機関の設立をもくろんだが、時期尚早であったため、四百年祭の協力会設立をまたねはならなかった。四百年祭協力会は準備期を通算して二か年半をついやしているうちに、在留同胞中央連絡機関創立の構想は、協力会幹部の間で徐々にねられていったのである。

こうして、在留同胞連絡の中核機関となるべきサンパウロ文化協会は一九五五年十月十五日、サン・ジョアキン街南米劇場（後の日活、現アラモ）において四百年祭典協力会解散総会ののちに、同じ席上で出席者百四十名のもとに創立準備委員会がひらかれたのである。

この創立準備委員会というのは、協力会の会長山本喜誉司および同会参与宮坂国人両人の構想によるもので、ひろくサンパウロ市在住の同胞によびかけるために、約七百名（一）をえらんで創立準備委員に推薦し、そのうちから各自が七十名の「実行委員」をえらびだすように依頼してあったものである。推薦された委員たちは七百名の名簿中から七十名をチェックし、返済された名簿のなかから得票順に七十名の実行委員をえらぶことになっていた。

実行委員にあげられたもの以外の準備委員は、反対意見

表示のないかぎり創立会員ということに決められていたものであった。

かくて、十月十五日の創立準備委員会では、この七十名が推挙され、さらにこのなかから「創立総会準備委員」十五名が選挙された。

十五名の創立総会準備委員がきまると、以後六回にわたって会創立についての相談がすすめられ、いよいよ暮れもさしせまった十二月十七日に創立総会がひらかれることになったのである。

しかし、これほど周到な準備のもとにひらかれたにもかかわらず、総会への出席者は、わずか七十八名にすぎなかった。しかも実行委員が六十一名、その他の準備委員の出席者は十七名という少数者だったのである。世話人たちの予想に反して、いかに中央機関設立に対する一般同胞の熱意がたりなかったかを物語るものであった。

とにかく、創立総会では、準備もとのついでだったので形式的にもせよ定款の逐条審議も行ない、役員はあらかじめ作製されていたシャツパー——推薦名簿——（理事二十名、評議員五十名、補欠三十名）の承認をもって簡単に終わった。

かくて、サンパウロ日本文化協会Ⅱ伯名、ソシエターデ・パウリスタ・デ・クルツィラ・ジャポネーザは発会したのであった。

ちなみに、えらばれた会長は山本喜誉司、評議員会長には宮坂国人、そして二世三人が第二副会長、第一および第二常任理事として加わっていることは、すでに戦前の日本人会とはちがった雰囲気となつてることが注目されなければならぬ。名称も、はじめ仮称されていたサンパウロ日本協会から「文化」の名を加えて、サンパウロ日本文化協会となつたことも、時代の新しい動きを示している。サンパウロ日本文化協会は、以後「文協」と略称されるようになる（そして、一九六四年四月に文化センターが落成するまで、文協の事務所はリベルダーデ大通り九十六番六階に設けられていた）。

文協の特色は、創立会員、正会員以外に、商社会員（一〇一〇〇クルゼイロ）を設定したことで、これが財源のおもなものになった。商社会員は百四十四社（六百八十二口）で、会員による会費の八倍半に達した。

会員の会費は、創立会員、その後に入会した正会員ともに月額二〇クルゼイロで、発足以来半年（一九五六年五月九日現在）会員二百四十二名、正会員六十一名であつた。

さらに会の事業としては、奨学金制度をもうけ、一九五六年度、すでに六名の大学生を援助しているのであつた。やがて、文協の外郭団体としての「日伯文化普及会Ⅱアリアンサ・クルツラール・ニッポ・ブラジレイラ」が二世およびブラジル人を主として一九五六年十一月十七日に

生まれ日伯文化交流の面で活動を開始する。以来、文協のおもな任務はコロナ一般の文化向上と連絡機関としての使命を遂行することに向けられるようになる。

全伯同胞連絡の中核機関としての使命をおびて出発した文協は、文化運動をその目的のなかにふくめているために、その後の文協の動きに対しては、いろいろな批判や要求がとびだし、

従来の連合日本人会と同質のものなりや

親睦をめざす娯楽機関なりや

同胞一般の文化向上を促進する団体なりや

等々、さまざまな論がとびだした。結局それらすべてを目ざす存在となるのであるが、それは内部機構の成長完備とともに、おいおい実現されるようになるだろう。

とにかく、各地、各所に、旧日本人会や青年会にかわる文化団体、娯楽クラブ、文化・体育協会というようにいろいろな会ができ、また、それぞれ利害を同じくするものが結合する傾向があるので、コロナの階級分化、職業の多様化とともに、各種団体が生まれることは当然であって、連絡機関の中核に位置して文化運動を推進する文化協会も、今後はいろいろ変貌していく可能性は充分ある。

いままで行なってきた文協の大きな事業は学生援助のほか、一九五八年三笠宮夫妻を迎えての「移民五十年祭」、それから一九六七の皇太子夫妻歓迎などであっ

た。最後の二つは連絡機関としての機能を充分發揮したものと見える。

注

(1) 当時サンパウロ市内在住の日系人は万(ママ)万余人であった。

第12部

コロニアの現状

75 戦後移民の渡伯

付 | 日本の企業進出

戦後のわれわれ日系コロニアにとって、最大の出来事の一つは「移民」の再開であった、といわれたように、停滞ぎみだったコロニアにとって、これはまるでながい冬がすぎて春がおとずれたような、明るい新鮮な気分をもたらすものであった。

戦後家族移民の第一着は、いわゆる「上塚、辻構想」のアマゾン移民であって、一九五三年二月十一日リオへ入

港した十八家族五十四名であった。彼らは、アマゾン流域に散在する日本人ジュート栽培地へ向かう人たちで、農家出身のものは六家族だけ、他は、会社員、農村の助役、土建業、企業経営、測量師、製菓業など多種多様で、このうちには陸士航空科卒、東京農大卒、満洲大卒、外語大卒がいて（移民船サントス丸の）奥山船長が「インテリ移民と名づけだのもさこそとうなずける（2）」人たちであった。

サンパウロからレポにおもむいた邦字新聞の記者の報道によると、「服装も戦前の移民とくらべて格段のちがいが目だち、サイアもブルーザもぴったりからだに合い、田舎臭さがなく、言葉も態度も洗練され、すべてははちきれそうな若さが充満していた（3）」

戦後呼び寄せ移民で、はじめてサントスへ上陸したのは一九五三年一月十八日、オランダ船チサダネ号で到着した五十一名の主として独身青年たちであった。再渡航者も同船していたが、呼び寄せ移民のなかには「南の花嫁」といわれた娘たちもいて、その後にぎやかな話題をコロニアに提供した。

一九五三年七月八日には「松原構想」による第一回の、マット・グロツソ州ドウラードス連邦植民地へ向かう十二家族百十二名が、オランダ船ルイス号でサントスへ着いたときは、「十三年ぶりの日本移民に、コロニア挙げて

昔を回想」と『パウリスタ年鑑』が記しているようにこの記事が新聞にでたときの反響は大きかった。さらに、同年八月九日には、やはりオランダ船のチチャレンガ号でドウラードス移民第二陣百二十九名がサントスへ着く……。

こうして、やがて55年の9月には「コチア移民」とよばれる独身青年二十五名も渡来、一九五七年までの四年間に（アマゾンおよびバイア移民もふくめて）約二万の新来者を迎えたのであった。戦前の最盛期の一年間の入伯者にも達しない数ではあったが、ながく新来者をみなかったコロニアには、これだけの数、しかもサンパウロ州から遠い、アマゾニア、バイア、マツト・グロツソ地方ではあったが、ジャーナリズムをとおした反響は大きかった。しかも、戦前には問題にもされなかったような「脱耕者」がでるたびにジャーナリズムはこれを取りあげて、彼らが「入耕地」に落ち着けなかった理由を報道した。

ここでは、戦後移民がいかなる経路によって渡航するようになったかについては、いっさいはぶくことにする（4）。

ただ新移民なるものが、コロニアにどんな反響をもたらしたかを「コロニアの生活の歴史」のなかで考えることにしたい。

戦前から、旧移民にとって新移民は、なつかしい日本の姿の一部であった。もし自分のところへ呼び寄せた移民である場合などは、家長たちはみな、いそいそとサントスへ迎えにでた。年がら年中、強烈なブラジルの太陽にやかれた赤銅色の自分たちとちがって、なめらかな白い肌。ブラジル語がまざったうえに全国方言をごっちゃにした舌足らずの日本語に対して、テキパキとした日本の日本語。もうわすれられたような日本的なあいさつ。

それらはすべて心の底にひそんでいた郷愁をかきたてるに充分であった。

さらに、彼らの口から語られる最近の日本のかがやかしい進歩の姿、また、植民地へ連れこんだ暁には、郷里の人たちのその後の様子もきかれることだろう。歓迎会には最近流行の歌もきかせてもらえるし、やがてはその歌を自分たちもならうことができるだろう。子供たちは、日本からきたての日本人から、正しい日本語をきいて、自分たちのまちがった日本語を訂正するだろう。植民地に新来の移民が四、五家族もふえれば、二、三十家族の集団には、なにか新鮮な気風がもたらされる。新移民たちは、新日本文化の伝達者として多くのものから注目された。

だが、彼ら新移民たちは、ブラジルの日本人に接してみなびつくりする。第一に、ブラジルの日本人は、こんなに色が黒いとは思わなかった。しかも、話す言葉には、わけ

のわからないブラジル語がやたらにまざる。また、なにをきいてもたのんでも、どうも要領をえない。もしこれが日本だったら、さしあたりピンボケの低能ではなからうかと思う。だが、自信たつぷりの様子をみると、決して低能ではないらしい。

とにかく、西も東もわからない地球の裏がわへきて、ブラジル人につきあつて言葉の不自由も感じないらしいこれら旧移民にたよれることは、なんとしてもしあわせだと思う。彼らは実際以上に旧移民の能力をいかかぶることすらあつた。

いよいよ田舎へ連れこまれて、まずおどろくことは、ブラジルの広さとかみどころのないような原始的農法であつた。そして、自分たちがいよいよ鋤をとつて働く段になると、炎天のもとで、たいした知識も技術もいらぬようなその原始的な労働も、決してなまやさしいものではなく、むしろ、肉体的な疲労は、日本の集約的な、こまかに気をくばる農法よりも、ずっと身にこたえるのにおどろかされるのであつた。

「ブラジルでは気ながに、落ち着いて働くことがたいせつだ。あせりはなにより禁物ですよ」などといわれても、少しもピンとこない。肉体的な疲労は、気分をいらだたせて「こんなことで長つづきがするだらうか」と思いなやむようになるからであつた。

さらに、旧移民のパトロンたちは、新移民が働きだして、ブラジルの事情をこまごまと尋ねるようになる、必ず「過去の経験」を語りだすのである。それは自分たちがコーヒー農場へはいったころ、いかに監督においまわされながら働いたか、原始林開拓をはじめたころ、いかに食糧、医薬、労力等の不足のために苦労したか、そして、いかにそれらを克服して「英雄的」に働いてきたかを語りきかされるのであった。新移民たちにとって、これはたしかにめずらしい体験談であった。しかし、なにかコツンと胸にこたえるものがあつた。「これほど、なにからなにまで世話してやっているのだ。それは自分たちが過去において、苦労に苦労をかさねて現在になつたからこそできることなのだ。少しくらいの苦労はすすんで味わうべきだ。文句はいわせないぞ！」といっているようにもひびくのであつた。

旧移民たちは、新来の文化移民を迎えたよろこびのあとは、自分たちの苦労話をきいてもらつて、「いや、ごもつともで、おかげさまでわれわれは、こうして安心して働けるわけです……」とほめてもらいたかつたのではあるが、パトロン（主人）とコロノ（雇人）の立場になつてみると、そうは単純にうけとれるものではなかつた。

「また、おやじの自慢話がはじまつた。あれは、どんなばかでも、やむをえない三十年前の苦労だったのさ。今日の

われわれも、あのむだな生活をくりかえさなければブラジルでは成功しないかのような口ぶりだが、それでは世の中に進歩などあるわけがない。あの連中には、昔話より自慢になるものはなにもないのさ、わしらの立場は、あの、あほらしい生活を二度とくりかえさないようにするところにある……」と反発するのであった。

新移民たちは、旧移民の盲点をしらべあげ、いかにして彼らの現在を自分たちの出発点として利用するかを考えた。そして、五年、十年、自分たちもまた旧移民の列に加わることになるのであった。

戦後八年、日本から移民がこなくなつて十三年目、ブラジル邦人の生活も変わったが、日本の生活も変わった。ブラジルの日本人にとって、日本の生活が戦争と敗戦とを經過して、どんなに変わったかは、想像を絶するものであった。しかし、在伯邦人は、戦争中の枢軸国民に対する圧迫と戦後のコロンビアのいざこざを経て、日本に対するあこがれは、いやがうえにも大きく、またつよくなつていたが、彼らが夢にえがく日本は、現実の日本とはおよそかけはなれていた。多くの人には、むしろ、戦前の直線的発展として空想された。たとい日本の敗戦をみとめていた人たちでも、彼らが精神的日本としてあこがれていたものは、深まるとも決して根本から変わったものにならう

とは考えられなかった。

在伯同胞は、戦時と戦後を経て、日本人らしい美点をすっかり失ってしまったものと思った。二世たちはもう自分たちがかれこれいうだけやぼだ。ちがった「人種」になってしまったのだ。ああ、今日の日本人をみたい、みて自分たちの考えていることの正しかったことをたしかめたい！　そういう要求があったればこそ、彼らの幻滅も大きかったのだといえる。

新旧移民の間の感情と思考のずれは、いつの時代にもあった。しかし、第二次大戦後ほど大きなずれがあらわれたことはなかった。

戦後渡来した自分の実子（娘）にさえも愛情を感じることができず、「はたしてこれがわが子であつたらうか」とうたがった親の心は、いかに十余年の歳月が、日本とブラジルの間に、深いみぞをうがっていたかを証明するものではなかるうか。

それは一九五二年七月十一日の『パウリスタ新聞』に発表された記事によるものであるが、戦後自分で稼いだ旅費をもって日本からはるばるたずねてきた娘（二十七歳）Aさんを迎え「別れて以来の苦労、戦争の悲惨を話してきかせたが、どうにも肉親たちは納得がいかぬ様子で冷たい態度、十数年ぶりに再会した喜びもまったく裏切られ、Aさんのさびしさはたとえようもないものであった。

ところが、ある朝ふと目覚めたAさんが、なにげなく隣室の話をきいていると、『あれは日本に置いてきた本当のAなのだろうか』と両親の声、この両親の気持ちをきいて以来、Aさんはどうにも肉親のもとにいる気がせず、女学校卒業の学力を頼みに出聖、某産組に就職したが、あのときほど、人生のさびしさを深く感じたことはありません」と語っている」

同じ記事のなかにもあるように、戦後の勝組たちの間では、肉親の手紙すら、もしそのなかに敗戦の模様でもかいてあるものなら贋物としてかえりみなかった。戦後の日本を語る娘まで贋物あつかいにしたのであった。

こういうみぞができていた社会に新来の移民たちが来て、旧移民たちと接触しても、日本人らしくない日本人として反発されたばかりか、敵意をもたれることすらあった。もし、民主主義でもふりまわそうものなら「敗戦」以上の贋日本人としてあつかわれたことは当然であった。

聖市四百年祭に渡伯した日本の評論家大宅壮一氏は、「旧移民たちは二世に甘く、新来の青年に辛い」といった。また「旧移民たちは新来者に対して下士官根性を発揮する」ともいった。そこには、日本の日本人の目にうつった旧移民たちの新来者に対する態度が辛辣に語られている。全く、旧移民たちにとって、新来者たちの多くは「日本人らしくない日本人」としてうつったのであった。

あこがれと失望が二重になった。

しかし、どんなに失望しても、あこがれは失われなかった。新来の青年たらを娘の婿にしたい、娘を嫁にやりたいと望む旧移民はたえなかつた。日本的なあとつぎをえたいという気持ちはつづいていたのである。すでに二世にはのぞめなくなつたものを新来青年に求めたのであつた。「この新、旧移民の対立も、コロニアの社会からみるとき一つの過渡期的現象として発生したもので、これは今後、次第に減少してくるものとみられる」と「戦後十年史」の筆者がいつているように、一九六八年の今日では、「そんなこともあつたのか」とけげんな顔をするものもいるだろう。それは、日伯文化の交流が、最近いかに頻繁になつたかを示すもので、いわば「めずらしくなくなつた」ものであり、新来移民が旧移民の列に加わりだすと、今日の新来者との間に「つながり」ができ、みぞがうめられていったのである。

だが、戦前にもそうであつたが、今後といえども、全くなりがた日本とブラジルの環境に生きてきたものの接触には、多少の感覚のずれ、パースナリテイの差が感じられるのは当然である。

戦後日本の進出企業について

一九五三年の、土井、アストリア両陶器工業（5）を皮切りとする戦後の日本企業のブラジル進出を、移民の歴史のなかにくり入れることには多少のむりはあるが、これも五十余年のコロニアの歴史を土台にすればこそ可能なものであつたし、また「軽工業の大部分が現地邦人の会社との合弁になるもの」であり、「特にブラジル当局との政治的折衝や現地調査団などはコロニアの地盤をもとにして行なわれており、労働力の大半も日系によつて構成されている。したがつて日本の企業進出がコロニアの手によつて円滑な運営が行なわれているといつても過言ではない（6）」状態であつてみれば、ここに一応ふれておくことも必要であらう。

家族労働移民を基本とするわがコロニアの発展は、家族員の有償、無償の労働力にたよつてきた。農業から商業やサービス業にうつるときも、家族員の労働にたよらざるをえなかつた。キタンダ（果物野菜店、洗染業、ボール、エンポーリオ（食品店）薬局業は、家族員の労働によつて、親切、丁寧、迅速なサービスのゆえに順調にすすんだのだといえる。そこには労働問題もなく言語の障書による仲間割れの心配もなかつた。だから、日本移民の都市進出は、こじんまりとしだ小商売ふいとなみながら、二世の大

学卒業を待つという方向をとったものが多かったのである。

戦後、第一期的植民地の解体がはげしかったころから、今後の発展は、資本家的企業にあることが云々されていたのであるが、そのためには移民の頭脳と技術は一つの限界点に達していることが指摘された。

すでに農業といえども、家族員の筋肉労働を主体とした時代は過ぎていた。昔から、ブラジルの百姓は、いかに上手にカマラーダ（人夫）をつかうかによって成功、不成功がきまるとされていたが、時代はすでにそれがよそごとではなくなってきたのである。

農家では、おのが生産物を、ただ中間商人の手にわたすだけでは、仕事そのものはいかに手広くやろうとも、実収においては筋肉労働者と変わりがなく、ことが痛感され、集団企業による加工へすすまねばなくなる。

だが、戦後数年間は、コロニアの株式会社も「その大半は個人経営のものを税金関係その他のため、株式組織にきりかえたものが多い。つまり、株主を広範囲に求めることは、資金的には強くなっても経営がむずかしくなると同時に、それだけの腕がないためだともいえようが、これも個人企業から集団企業への移行過程としてむりもないだろう」と『コロニア産業地図』の編者もいつているように、一九五〇年ころまでのコロニアの集団企業は、まだそ

の萌芽期にあった。

こうした時期にあたって、日本商社、企業会社の進出は、コロニアの、いわゆる土着資本の形成に大きな刺激となったことはみのがせない事実であろう。その小手調べは「現地邦人会社との合弁」というような形にあらわされたが、そうした組織と事業への参加は、コロニア人の視野をひろめ、技術への理解を深めることになったろう。

ここでも「日本的頭脳」と「ブラジルの頭脳」とは多少のくいちがいはあったが、これも一時的現象としてやがて解決されるだろう。かつて「大洋漁業」とサントスの漁業者との間に問題が生じたとき、コロニア人の間で、「日本資本の横暴」がさげばれたこともあるが（7）、それが一つの刺激となり、今日のサントス漁業者がたちあがったことは、みのがすわけにはいかないであろう。

いずれにしても一九五〇年代は、わが移民が近代資本主義的企業に向かった時期であり、そこにみられた日本資本の進出は、コロニアに大きな影響をおよぼした点で、移民の歴史にも一時期を画するものとして、オミットすることはできないだろう。

注

(1) 『コロニア戦後十年史』四八ページ、「戦後移民の動向」。

(2) 『パウリスタ年鑑』一九五四年、二二ページ。

(3) 『コロニア戦後十五年史』サンパウロ新聞社刊（一九六〇年十月）、一八ページ。

(4) 『コロニア戦後十年史』四四〜五一ページ参照。

(5) 同上、五九ページ。

(6) 同上

(7) 『コロニア産業地図』一五ページに「操業当初、地元漁業者との間に多少問題を生じ、その調整にひまどった……」云々とだけできているのがそれであった。

76 一九六七年五月の

皇太子夫妻歓迎について

国賓としてブラジルを訪問した皇太子夫妻に対する日系人の歓迎ぶりは、一九六七年における移民史上の大きな出来事であった。ここでは移民たちの祖国に対するあこがれと郷愁が、空前絶後の壮大さで表現されたものともみることができると。むしろ、この仕大さは、サンパウロ州と市の政府が、国賓としての皇太子夫妻の歓迎に全力をつくしたことが最大の原因ではあるが、なお、われわれにとって空前と思われることは、これだけの規模で示された歓迎の様子は、かつてみられなかったものであり、絶後とは、一世移民の数が、これだけそろふことは（遠方の各

州からも集まった）おそらく今後ありえないと思われるからである。その意味で、こうした熱狂的な歓迎は、二度とみられなくなるだろう。二世以下の日本に対する感情は、もう一世のそれとは全然別な姿となつてあらわれる可能性が充分あるからである。

皇太子夫妻は、一九六七年五月九日、東京羽田空港を出發、天皇の名代として南米三か国の正式訪問の旅にたち、ペルー、アルゼンチン、ブラジルを国賓としてまわつた。ブラジルの首都ブラジリアについたのは、二十二日午後二時三十分であつた。大統領夫妻以下、ブラジル高官、田付大使夫妻その他の出迎えをうけたことはもちろんであるが、宿舎、ナシオナル・オテルに向かう途中、およそ三千の日系人の熱狂的歓迎をうけた。沿道にむかえた人たちのなかには、遠くアマゾン地方からでできたものもあつたのである。

サンパウロ市に着いたのは、二十四日午後三時三十分であつた。空港に集まつた日系人は二万五千といわれた。むろん、空港から宿舎、オットン・パレース・ホテルまでの十数キロメートルの沿道でも、そこここに、まちかまえていた同胞のうちふる歓迎の小旗にむかえられた。

ホテルはアニヤンガバウーの谷に近いので、ここはすでに、歓迎の日系人、サンパウロ市民十万によつて埋められていた。翌日のオ・エスクード・デ・サンパウロ紙の朝

刊は、“Ovale nuncia viu uma festa igual” 「この谷間で、かつてこれほど盛大な祝典がみられたことはなかった」と報じ、

フオーリヤ・デ・サンパウロ紙もまた“100mil aplaudem Akihito” 「十万の民衆がアキヒトに拍子を送る」と一面トップにかきたてた。また。

“ Akihito teve a maior acolhida que S. Paulo ja deu” 「アキヒトはサンパウロがいままで示した最大の歓迎をうけた」と報じたのはディアリオ・デ・サンパウロであった。

そして、“S. Paulo parou a clamarou nas ruas Principe Akihito” 「サンパウロはその歩みをとどめ、街路にアキヒト皇太子を歓呼した」とディアリオ・ポプラーも報じたように、アニヤンガバウーの谷は、人間で身動きもできないほどであった。しかも、みればみるほど、そこには日系人の顔がそろっていたのであった。

皇太子夫妻は民衆のむらがるアニヤンガバウーの谷を通過して、一度サン・ジョン大通りへでて、さらにベロ・バグキロー街からパトリアルカ広場の角にあるオットン・パレース・ホテルへはいったのである。それから午後五時ころ、再びアニヤンガバウーの谷の特別設置のス

タンド（パランケ）に立って、サンパウロ市の二世たちによって挙行された山車の行進にのぞんだ。そこでは「先頭に鮮かな〃日の丸〃が、ブラジル人の旗手によって堂々と行進する。続いてブラジル国旗が、そして勇壮な音楽にのって州軍楽隊行進、真っ赤なユニフォームの女子四十名の鼓笛隊、そして、最初の山車はカフェザール（コーヒー園）を模倣したデコレーションに着物姿の美しい日本モツサ（娘）十名、次はサン・フランシスコ学園生徒四十五名の鼓笛隊、次々に現われる趣向をこらした山車行列に皇太子殿下は内ポケットから眼鏡をとりだされて興味深げにご覧になっていた（一）」

これらの山車は、ブラジル商社をさそって宣伝的意味もふくめて参加させたものであるが、その数三十四台に達し、午後六時におわった。谷は、旗の波と拍手にわきかえり、高いビルからは紙ふぶきがまいおちて夕ぐれのをにぎわした。

老移民たちはよろこびの涙にむせび、若い二世たちは美しい美智子妃にみとれた。

歓迎の最高潮は、翌二十五日のパカエンブー競技場でみられた。

二十四日の午後十一時二十分から二十五日の午前一時にかけて集まってきた奉仕隊によって場内清掃が行なわ

れた。彼らは「生長の家関係百人、日蓮正宗の百人、ボーイ・スカウト三十人、サドキン社員三十人」という顔ぶれであったが、つづいて「さらに多くの清掃隊が到着、午前三時ころは、奉仕隊と準備員は一千二百人にもなって作業はぐんぐんはかどった(2)」

この日の入場者一番乗りは年前一時四十分で開場は六時からであった。集まったもの、日系人八万といわれた。

十時かつきり、皇太子夫妻は、ソドレー州知事夫妻とともに入場する。そこには「印象的な光景がみられた。

数千の小旗が風にひらめき、底深いささやきがきこえた。それは声高になえられる祈りの言葉にも似たものであった。一国民の皇太子に対する尊崇を証しする音声であった」とデイアリオ・ダ・ノイテが翌日書いたような感激の一瞬であった(3)。

十時八分、特設の座席に皇太子夫妻着席、その隣にソドレー知事夫妻、少し後方にファリア・リーマ市長夫妻、田付景一大使、宮坂国人歓迎委員長、いちばん近い一般座席には、帯勲者、高齢者七十三人がすわる。四メートル四万の座席のまわりは、歓迎の花でかざられていた。

十時十分、一瞬のしわぶきもない静けさ、司会者井上忠のあいさつ、日伯国歌の吹奏、三千人のコーラスが会場に流れる。

「起立してしっかり胸を張った八万人は『君が代』をうた

いながら、感動にふるえる。そつとハンケチで臉をふく婦人、くすんと鼻をつまらした老人のしわだらけの頬を、二滴、三滴と涙が筋をひいて流れた(4)。「それは愛情の涙であった。長いあいだ、祖国を遠く離れたものの涙であった(5)」とディアリオ・ダ・ノイテの記者は追加する。

「ようこそ皇太子ご夫妻！　といまここにお二人をお迎えできた大きな喜びの底から、母国を思う強烈な郷愁がもりあがってくる(6)」のであった。

こうしてはじまった歓迎会は、十時五十分、後藤武夫(八十歳)の音頭で、万歳三唱、司会井上忠の皇太子退場のしらせで「さくら、さくら」の大合唱のもとに、皇太子ご夫妻はやがて会場外にきえる。かくて、「偉大なる時グランデ・モメント(7)」は過ぎていったのである。

さらに、この日はCEASA(州食糧配給センター||市場)の農産・工業展覧会にも「パカエンブー歓迎会場の人波をそのまま移動した」ほどのにぎわいを呈し、夕刻には文化センター訪問があり、この夜は州知事晩餐会に出席した。

翌二十六日は大学都市、その他の歓迎会にのぞみ、年後三時皇太子夫妻は、数千の同胞の見送りをうけながら、リオ・デ・ジャネイロに向かったのである。



「サンパウロはその歩みをとどめて……」
「パウリスタ・グラフ」より

8万人の万歳



バカエンブーにおける8万人の万歳
「パウリスタ・グラフ」より

こうして、日系人にとって空前のサンパウロ大歓迎の二日間はすぎさったのである。

「サンパウロ市はその歩みをとどめて……」とブラジルの新聞が報じたように、このときに示されたブラジル人の厚意は、これも空前のことのように思われる。オ・エスタード・デ・サンパウロをはじめとして、各大新聞が三ページ、二ページとスペースをさいて、写真入りの大報道を行なったのも稀有なことであつたらう。しかも数年、十数年と遠く祖国をはなれた老移民たちに示された同情あ

ふれた記事は、よむものをして、つい熱いものが胸にこみあげてくるのをおさえることができなかつた。

「これで思いのこすことはありません」と、インタビューに答える老移民の言葉を、ブラジル人記者たちは、わがことのように報じている。そこには、日本人の気持ちを異なものと感じる気配はみじんもなかつた。

むろん、邦字新聞の記者たちも、涙にむせびながら歓喜する老移民の気持ちを伝えることに意をもちいた―
「皇太子殿下ご夫妻をはつきりみた喜び」をパラナ州カンポ・モロンの近郊で農業をいとなんでいる七十二歳の老翁にたずねている。

「祖国への思いが、この一瞬で強く心にわいてきました。若い人にはわからんだろうが、四十数年間の苦しい生活、"ジャツポーン"といわれながら、戦時中のいやな思いを心の片すみに残してきたものです。あるときは、日本人であることにひがみを感じたことも、正直にいつてありましたよ。しかし、わしの生涯もこのいつときで、どれだけ救われたか、貧しい生活をつづけてきたものにしかわからないことだろうがね、と鼻をすすりあげ、ポツポツと語った(8)」そうである。

さて、ブラジル人記者たちが、はじめ好奇心をもって期待したことは「平民」出の皇太子妃を、どのような態度で在伯日本人が迎えるだろうかということであった。

これはデモクラシーを奉じるブラジル人の当然な期待であつたろう。しかし、「平民」の出だからといって、とくにどのような特別感情をもたず、むしろ美智子妃の「やさしさ、美しさ」に感動する日系人の態度に安心し、感動を同じくしたようにさえうけとれる。

皇太子夫妻歓迎準備委員会が集めた寄付金は全額二五三一万五四六〇コント、その他の催事による収益を合わせると二九二三万〇七二四コントとなった。しかもあらゆる費用を差し引いて、なお一〇万コント余の金額が残つたということは、いかにこの歓迎に、同胞一般が熱心であつたかを物語るものであろう。

皇太子夫妻の旅行には、日本の各新聞報道班も同行したのはむろんであるが、五月二十九日の東京「産経」の社説は、訪問先の南米で、現地日系人から熱狂的な歓迎を弾けられていることに側連して「日系人に残る明治の精神、ヤマトダマシイの問題」をとりあげて「この言葉にあらわされている日本人の誇りを日系人から大いに学ぶべきだ」と強調していることを、五月三十日のパウリスタ新聞（第二ページ）は報じている。

いままで「ブラジルでは明治の精神がいまだに生きている」と評されてきたことについて、コロンビアの人たちは、なにか「コロンビア人の停滞性」をやゆされたような気持ちでいたのであるが、こんなおほめ（？）の言葉をちよ

うだいして、はたしてどんな気持ちがしたろうか。

これは、日本にいてさえ、ひそかに「明治の精神」をもちつづけている人たちの羨望をあらわすものではなからうか。

移民たちが明治の精神、ヤマトダマシイをもちつづけていることの証拠はたくさんある。歓迎を「奉迎」とかき、「みにいく」を「おがみにいく」といつていた旧移民も少なくなかった。ある日本移民研究者のアメリカ人は、パカエンブーへ行つて、そこにいた移民の老女性に「ここからでもみえますか」と日本語でたずねたら「わたしはみきたのではありません。おがみにきたのです」と即座に答えられてどきまぎしたという。若年で渡航した移民のなかには「皇太子さまをおがむ」という言葉を忘れていたものもある。また、民主的な今日、そういう言葉はもう使わないのだ、と割りきって考えていたものもあつたにらがない。しかし旧移民たちは、美智子妃の美しさにみとれている子供や孫たちをよそに、合掌しているものもあつたのである。彼らは、戦後の勝ち負けのあらそいの混乱のなかにも、昔どおりの祖国と皇室の繁栄を信じてきたが、いままのあたりに皇太子夫妻の「荘厳なお姿」を拝して、「おもいのこすことがない」とつぶやいたにちがいない。

コロナ史を綴っている筆者は、なにかこのへんで、大

きなペリオードを打たなければならぬような気がする。わが六十年の移民史は、五十九年目の五月に、一応の幕がおりたのではなからうか。

注

- (1) 『日伯毎日新聞』五月二十五日。
- (2) 同上、五月二十六日。
- (3) “Foi um espetáculo impressionante. Milhares de bandeirinhas agitavam o vento. Era quase como uma prece em voz alta. Um ruído que evidenciava a veneração do povo pelo seu príncipe.” *Diário da Noite*, 25-5-1967. p. 8
- (4) 『日伯毎日新聞』五月二十五日。
- (5) “Uma lagrima de amor. Uma lagrima de quem está longe há muito tempo de sua terra.” *Diário da Noite*, 26-5-1966. 午前版。
- (6) 『日伯毎日新聞』五月二十五日。
- (7) 『デエイアリオ・ダ・ノイテ』五月二十六日
- (8) 『日伯毎日新聞』五月二十六日。

(北パラナ同胞の現状)

ロンドリーナ市のスケッチ

近年サンパウロ市から北パラナのパラナバイー市までアスファルト道路が完成して、北パラナ名物のポエイラ（ほこり）がなくなった。黄塵万丈とはいわないが、とにかく、昼ひなかでも、自動車やトラックはヘッドライトをコウコウとともして、追突をふせぎ、追いこしには充分の注意を払わなければならなかった。他の車といきちがう場合は、窓ガラスを密閉することをわすれたらたいへんだった。そのポエイラがなくなったのである。

また、雨ふりには、油の上をすべるような危険な道路であって、他州のなれない運転士は、路傍へ車をすべりこませ、にっちもさっちもいかなかった。そういう困難をアスファルトは救ってくれた。

市街地の商店では、店さきのほこりを払うために、年百年中、だれかはたきを動かしていなければならなかった。もうシャツの襟を気にしなくともよく、ミニスカート少女たちも、サンパウロなみに歩道をかっ歩している。赤土にまみれたパラナの町も、アスファルト舗装のおかげで、いつも新鮮な色彩をたもつことができるようになった。

ロンドリーナ市のセンターには、夕方になると学校をひけた学生たちが、三々五々手をつなぎあっていきかう姿がみられる。目だつのは制服の女生徒たちだ。しかも、なんと日系少女の多いこと。ときにはブラジル人ボーイフレンドと手をとって楽しそうに歩いているものもある。

時代が大きく転換したことをはっきりと示している。

いちばん繁華なアベニードに並行した東側のセルジツペ街には日系人の商店が多い。食品店、小間物屋、バル、果物屋、魚屋、菓子・アイスクリーム店、書籍・文房具店、薬局、理髪店と、かぞえればきりがなし。しかし、移民一世が日本人相手に商業をいとなんでいた時代のように、日本字の看板はあまりみあたらない。また、店さきに姿をみせているのは、ほとんど二世、あるいは準二世とよばれるブラジル育ちである。一世の老人は住居のほうにひっこんで、孫の守りをしたり、植木や草花をながめたりしているのか、ほとんど姿をみせない。土地の人に聞いてみると、精米所やコーヒー精錬所などには、まだ一世の老人もがんばっているが、これは農村からでてくる一世相手の商売であるため、老人でもまにあうのだという。だが、多くのブラジル人や二世相手の商売には、もう老一世ではまにあわなくなったといわれる。

農村協同組合の幹部たちでも、渡伯時代の一世の家長ではなく、若き日にブラジルの土をふみ日伯両語に通じた

四、五十代の人たちだ。"四十二世"という言葉があるほど、二世も中堅として活躍している。

街頭で若い人たちの語る言葉は、みな流暢なポルトガル語である。体格もよく、昔みられたいじけたような一世女のタイプはなくなった。果物屋などに、たまに一世の中年女性をみかけるが、はいつてくる二世嬢は「おばさん、これいくら？」といかにもあらたまった調子の日本語でたずねる。二世たちは直観的に、相手が一世か二世かを判別する。そして、一世には礼を失しないように、わざわざ日本語をつかう。いじらしい感だ。

おそらく家庭では、父母に対しては日本語をつかっているのだろう。むろん、親しい間がらだからブラジル語がまざる。第一、父母に対して、おとうさん、おかあさんとよぶよりも、パパイ、ママイとよぶほうが多い。

「ママイ、もうジャンタ（夕飯）できた？」
「まだよ」

「ああ、シトウ・コン・フォーメ（おなかすいた）」
とブラジル語になることはめずらしくない。

兄弟同士ではほとんどポルトガル語。一世のお客さんには特別に日本語。でも、こちらがポルトガル語で答えれば、ほっと安心したように、親しみをこめてポルトガル語で話します。

私は友人の家にやっかいになっていて、彼の誕生日

にめぐりあわせることができた。祝われる父親以外、母親をのぞけば二世と三世であって（私は偶然のとびこみ）、あとで、「おじいちゃん」が出席しただけだ。

御馳走は、のりまき、いなりずし、こぶまき、それに、じゃがいも、にんじん、トマト、オリーブの実などのマヨネーズ、牛肉のコロッケなどが塩あじのもの、その他に、クリームのはいつたりンゴ・パイナップルのお菓子、お祝いのボーロ（ケーキ）、飲み物は、ビール、グアラナー、ソーダ水などで、シャンパンも一本あけた。みんなで乾杯してから御馳走をたべる。二世も三世も「おすし」をたべた。最後に、誕生日のケーキを切ることになるのであるが、祝われる主人公がナイフで切りこみを入れるとき、ケーキの上には四十九歳をあらわすろうそくをともし、電灯をけす。

みんなで手をうちならし祝いのうたをうたう。

Parabens a Voce,

Esta data querida

Muitos felicidades

Muitos anos de Vida……

Viva!

うれしい今日の誕生日

おめでとう

いつもしあわせがいっぱいで

ながいきしますように……

万歳………

うたいおわり、祝われる主人公がろうそくをふきけす。電灯がつく。それから、お祝いのケーキが紙の小皿でくばられる。子供たちが父親の誕生日を祝ってプレゼントをわたす。プレゼントはブラジル式に、うけとるとその場でひらいて、みんなにみせながらお礼を述べる。これはこのブラジル人の家庭でもみられる誕生祝いの光景である。ちよつとちがつているのは、御馳走に、おすしやこぶまきがでただけであった。

農村をのぞく

都会の生活は、サンパウロ市も、北パラナのロンドリーナ市も、おそらく、その他の都市も変わらないだろう。

都会生活がいちばん早くブラジル化する。

ここでは、ロンドリーナからマリノガー方面にわたる、北パラナでは、いわば旧地帯に属する農村生活をみよう。まだ農村地帯では郡道が多く、アスファルトになっていないのが特長である。ここでは、昔ながらのポエイラがみられる。

だが、いまは少しずつ農村電化がすすんでいる。都道はたいがい高台をとってコーヒー園をつらぬいている。そこで、地区のカレアドールをすぎてやや低みにあるシ

テアンテの家近づくとことになるのであるが、遠くからでも、テレビのアンテナがみえるのは音とちがった風景である。

この地方の住宅は、昔ながらの木造で白亜のレンガ建てはほとんどみられない。テラ・ローシャ地帯の土はレンガ製造にむかないので、遠くからとりよせなければならなかったのと、この地方が大森林であったために、製材所が各所にできて、材木が割合に安く手にはいったことなどが、その理由であった。むろん、初期には屋根も木っ端を用いたが、現在はみなフランス瓦になっている。建築様式はほとんどブラジル式で、玄関や外郭の軒などに日本的装飾をみることはあっても、遠方からは、ほとんど気づかれないくらいだ

どこでもそうであるが、ソファアのすえつけてある客間は、日常はほとんどつかわれない。めずらしい客があったときだけここへ通す。たいがい、食堂に近いほうの入口を利用する。そして食堂は炊事場につながっている。

ただし、テレビは客間にあったり、食堂にあったりいろいろで、もし客間にあれば、ここが夜間や日曜、休日に家族のものが団らんする場所となる。テレビが客間を解放したのである。電気のあるところなら、たいがい電気冷蔵庫もそなえてある。ビールやグラナーをひやしたり、肉類を貯蔵したりするために必要であるが、近来は町から野

菜を買ってくることも多いから、そのためにもなくてはならないものとなったのである。電気のないところでは、石油冷蔵庫をもちいている。

昔（といっても十年前）と変わっていることは、プロパン・ガスと薪とを併用していることである。これは時間の経済にもよるだろう。朝おきてコーヒーを入れるときや、客があつて、お茶をだすときなど、即座に火がつかえるからである。しかし、本格的に食事をととのえるときはやはり昔どおり薪をつかっている。薪は荒山の雑木を大量に購入することもあるが、ユーカリ樹の薪を買うこともある。

炊事用の水も、モーターで一度水タンクにあげ、そこから鉄管で家の中に導入しているところが多い。むろん電力のないところでは、昔ながらの方法で、井戸から綱でバケツを巻きあげている。また、風呂水などは、低地の泉や小川から、灌水用ポンプで吸いあげているところもあるし、そうしたポンプの水を飲用水にしているところもある。またときには、遠方から溝を通して、家のそばに水をひき、かけひなどでタンクにためているところもある。水のとり方は電力のないところではさまざまである。電気がきても、農家ではまだシャワーが普及していない。あい変わらず小屋にドラム缶をすえて、五右衛門風呂である。

便所はいまだに母屋から少しはなれたところにたっている、いわゆる“カジ―ニヤ”である。たまには穴の表面を板でおおうかわりに、セメントでかため、瀬戸ものの便器をすえているが、しゃがみこみのものが多く、都会的な水洗にはなっていない。

このような、なにかまだ中途半端な、半都会的生活様式は、これ以上生活の改良をすすめる意志を欠いているような停滞性、あるいは、まだ定住の地として決心しきれない浮動性が感じられる。ということは、彼ら小農の多くは、いまや都会にも住宅をもち、子供の教育のためといって、そこに老人や子供たちを住ませ、自分たちもときどきそこにいつて寝とまりするような、ふたまたかけた生活をしているものがかなりあり、また、農村の家は、だれか監理人（身うちのもの、ときには全くの他人）にわたして、自分は都会生活者となっていくものが現に多く、また、年々増加していく傾向があるからである。農村における生活は、ここまできて、これ以上はもう改良してもしかたがないという主人の気持ちを反映しているように思われる点がある。そうした生活の面から観察すると、むしろ、サンパウロ近郊のほうが、定住性を示し、生活の設計に意をもちていることがわかる。

シチアンテの生産様式（過去）

これらの事情は、今日の北パラナにおけるシチアンテの営農形態をあることによつてあきらかにされる。

まず、シテオ（小農場）の地形と作物の分布、および生産様式の面からみていこう。

どこの“植民地”でも、一〇〇〜二〇〇アルケール程度の地区は、エスピゴン（分水嶺）から低地、あるいは小用に向かつて、やや尻つぼみのたんざく形になっているのが普通である。これは、ノロエステや奥ソロカバナの第一期植民地の形とほとんど変わらない。高度四〇〇メートル以上の地味のいいところにはコーヒーをうえ、霜のお



家族員だけの労働時代
『のろえすて年鑑』より

そのある低地は、雑作（米・綿・とうもろこし）というようにして、はじめの四、五年間は、自家労力と臨時の「日雇い」などによって生産をつづけた。ここでは少し記述がこみいつてくるが、現在をよくしるために、過去の生産様式にさかのぼって一応歴史的展望をこころみ、現在をみることにする。

入植六、七年目、すなわちコーヒーがなりだしてからのは、コロノ二、三家族をいれて、自家労働の負担を軽くすると同時に、“小パトロン”的生活にはいる。家長は、学校問題、組合問題などで、家をあけることが多くなる。すなわち、子弟の教育と生産物の販売のことで用事がふえる。主婦はコロノ（といっても日本移民が主であった）の相談相手、長男は自分でも働きながらカマラーダ（人夫）の監督というように、少しずつ家族のものも仕事の分担がきまってくる。娘たちは、嫁入りの準備として裁縫をならう。あるものは植民地内で、他のものは町へかよう。裁縫をやらないときは、母親や兄弟たちと畑の仕事にでる。あるいは低地の野菜畑の仕事、家畜（主として豚）の世話をする。食糧はなるべく自給自足的に工夫し、コーヒーでもうけようとする。だから、採取期には、コロノもカマラーダもシテアンテもみんな採取の仕事をする。コロノには一袋いくらで採取賃を払い、カマラーダには運搬や乾燥場の仕事をさせて日給を支払う。どこの家にも

馬車（ラバ二、三頭でひくもの）があつて、採取したコーヒーは家の近くの乾燥場へはこぶ。

二〇〇メートル平方くらいのレンガの上にセメントをながした乾燥場があり、これにツーリヤ（コーヒー倉庫）がつき、生がわきのコーヒー（外皮づき）を一時保存するためのセツカドルという小屋も乾燥場の一角についている。むろん、テララ・ローシヤ地帯には、乾燥場のかたすみには、いつも水を流しこめるようになっているセメントのタンクがあつて、コーヒーを乾燥場にひろげるまえに、ここでちよつと水あらいをする。

乾燥場の仕事は、カマラーダとともに男たちがやるが、乾燥度を平均させるために、コーヒーをませかえす仕事がある。厚くひろげたコーヒーを太い歯のついたくままでのようなもので畝立てするようになぐあいに、外皮づきコーヒーをひっくりかえしていくのである。この搔棒つかいは女もてつだう。また、せつかくかわきかけたコーヒーを夜露にあてると、もとにもどるので、夕方はなるべく日のあるうちに、数個の山につんで、ズツクの大きな布でおおいをする。採取期にはあまり雨はふらないが、全然ふらないという保証もないから、雨よけのためにもこれは必要である。こうした仕事は、コロノにはさせないのが普通であるから、しぜん、家のものが、カマラーダとともにやることになる。

とにかく、この時代は、まだ自家労力が中心であって、シチアンテは一種の自作農であった。そしてこれはノロエステや奥ソロ・カバナの日本移民が行なったところの生産方法であって、北パラナにおいても、はじめの十〜二十年くらいは、こうした営農法をくりかえしたのである。



シチアンテの家 (木造)

シチアンテの生産様式 (現在)

ところが戦後は、ぼつぼつ世代の交代がはじまり、いままでの青年たちが家長となり、生産の実権をにぎるようになる。また、農村労働者 (コロノやカマラーダ) に対す

る政府の保護政策もとられて雇用関係も複雑になる。

さらに、一時のコーヒー景気もてつだって、農村にも消費文化が浸透しはじめる。農村電化によるラジオ、テレビ、電畜、電気冷蔵庫などの分割払いの購入などがそれで、コロノの家にもラジオがなり、テレビのアンテナがそびえるようになる。渡り鳥のカマラーダでさえ、豪華な腕時計をはめ、トランジスタラジオを肩にかけて日曜の散歩をたのしむようになる。

新首都ブラジリアの建設は戦後のインフレーションに拍車をかけ、歴代の政府がとってきた工業化政策は、労働者の都市集中をうながして、一時は農村における労力不足の現象もあらわれた。一九六四年四月以後のいわゆる“革命政権”の時代にはいると、かねての懸案であった農村労働法も実施されるようになって、それまで無計画的であった農業者、とくにブラジルの事情に暗い旧移民たちの生活に脅威をもたらした。それは新しい法律事情に通じない日系農家に就働する労働者たちを扇動して、法律違反の訴訟をそそのかすような悪徳弁護士もあらわれて、各地に問題をおこしたからであった。労働問題における裁判では、たいがい小農たちの敗北におわるのが常であった。「うかつに人は使えない」という気風が農家にみなぎった。

こうした傾向は、大農にも影響して、従来のコロノ本位

の生産様式を根本から崩しだした。コーヒー樹手入れの年間請負料を、月割りにして支払っていたメサーダ制では、コロノのほうでも食べていけないし、徹底した賃金制にするためには、収穫期と除草期における労働の配分が均等に行なわれない。コーヒーの単一作がなりたたなくなってきたのである。だから一方では機械化の多角農へうつることを考え、また単一作にしても、コーヒーよりも一年中の労働の配分が平均して行なわれる可能性の多いさとうきび栽培にうつり、製糖工場を経営する大農も出現する。かつては北パラナ初期の発展地であったカンバラ方面の大農場が、今日ではほとんどコーヒー樹をもたず、みわたすかぎりのさとうきび畑にしてしまったのは、その一例である。

コーヒーの単一作から機械化の多角農へうつろうとする時代、その過渡期的現象として、ノロエステや奥ソロカバナの旧地帯の日本人小農たちは、従来のコロノ制から歩合制への転換をこころみだした。それは、ブラジルが十九世紀の後半外国移民を誘入しだした当時の、いわゆるメサーダ制以前の歩合制度とはかなりちがったもので、地方都市発達のおかげで、生産物品買の自由もあり、歩合者には充分儲けを予想させるかわり、責任をもって増産するようにしむけることであつた。コーヒー成樹を歩合者にわたし、地主四分、歩合者六分というようなこ

ともあつた。地主のほうではただ正味四分を取得するのみであるから、歩合作者のほうがコーヒー生産に経験のあるコロノ上がりであつた場合などは充分むくいられたし、地主のほうでも、安心してコーヒー園を生産者にわたすことができた。

こうした方法は、現在北パラナ地方にも普及している。今日の最低賃金制定下では、契約書の作成、監理者の雇い入れ、労働者の苦情に対する悪徳弁護上の活躍などによつて、むだな支出と時間の空費が多いので、いい歩合作者（ポルセンテイロ）をみつけ数年にわたつて生産をひきうけさせる方法がいちばん楽であることがわかつたからである。大きな儲けがないかわり安全性がある。そして、こうした方法によつて生産されたコーヒーで、さらに大きく儲けようとするものは、コーヒー精選所（マキナ）を経営して、皮つきコーヒー（コツコ）を買いこみ、これに加工して売りさばく仕事のほうへうつる。今日、北パラナでは、どこの町へいっても、日本人のコーヒー精選所の二、三か所ないところはない。彼らはブラジル人のマキナと競争で商売しているのである。

さて、この生産の方法は、一見単純のようにみえて案外めんどろなこともある。というのは、いい労働者は小金をもうけて、上地を購入し、どんどん独立していつて、のこるのは「分け前」だけをねらい、その「分け前」をいかに

して多くするか、努力を払わないものがでてくるからである。また、コーヒー栽培は、結実の多い年は一年おきであるから、数年の労働によらなければ儲けはのぞめないのである。しかも、その間に霜害でも加われば、「これでは食っていけない」といって労働者がゴネだす。たといい歩合でも、収入が最低賃金に満たない場合は、農村労働法によって問題にされる。

だから、労働者が生活できて、そのうえ、いくらかでも儲かるようにするためには、地主のほうでも、いい人間をえらぶこと、儲かる方法を教えてやることなどの努力とともに、ときには肥料の供給もしてやらなければならぬ。歩合作の契約には、歩合作者に施肥の義務を課さないのが普通だからである。

どうしたらいい歩合作者　—　ポルセンテイロ　—　をみいだすことができるか。素性のわかった日本人家族なら申し分ない。また働き手の多いヨーロッパ移民も、もし前歴がわかれば安心して契約できる。ところが、まえにも述べたように、こういう人間は、どんどん儲けて独立していく。のこるのは北伯方面から出稼ぎにきた無経験者ということになる。しかし彼らでも数年しんぼうして儲けたら独立しようとする野心をもつものなら指導のしようもあるが、なかには、長いあいだの食うや食わずの生活のために、働いても働かなくても、生活には変わりがない、

できるなら体を動かさずにその日その日を楽しむのが得策だ、というような宿命観が習性となっているようなものがある。こうした人間をただちに判別する方法はない。そこで、彼らを日給仕事や請負仕事につかってみる。こういう労働者を、北パラナ方面では、ボランテといっている。いわばいままで他の地方でカマラーダと称していたものと大差はない。ただ、従来のカマラーダには独身者が多かっただけである。請負仕事などは一千本のコーヒー園除草賃いくら、というふうにやらせる。

請負いだから、せつせと働いて、割がいいかどうかをみる。また仕事のできるものなら、この畑の除草を、いくらで請負ったらひきあうか、その判別もつく。こうしてボランテの実績があがれば、歩合作をすすめてみる、ということになるのである。それでも、計画的に主人をよろこぼせておいて、歩合になるとあまり仕事をしないものもあるし、たとい働いても、どうしたら儲かるかの計画がたたないものもある。しかし、まじめなものなら、主人のほうからいろいろ忠告して、産物の増収によって儲けを多くするようにしむける。

こうした労働者の条件と、主人側のコーヒー園のよしあし（地力・樹齢など）によって、歩合は地主四分、歩合作者六分、あるいは半々、逆に歩合作者西分、ときには三分五厘というようにいろいろ変わってくる。生産力のあ

るコーヒー園なら、歩合作者が三分五厘をうけとつても収入は多いのである。だが、コーヒー生産の無経験者や結果としての分け前だけをねらうものは、たとい六割をもらうとしても、実際の収益は少ないのである。だから、コーヒー樹の手入れをまくし、増産をはかつて収益をあげるような労働者をえらぶために地主は苦勞するのである。しかし、現在では、ポルセンティロの数も増加したので、彼らの間にもコーヒー栽培の知識もいきわたり、生活も安定して、あまり激しい移動はないようである。

このように、歩合作制度のために、古いコロノ制度は旧コーヒー地帯ではほとんど姿を消す時代となっている。ただ、コーヒー生産の少ない地方で、コーヒー園内に充分間作ができる新地帯だけにのこっているのが現状である。こういう地方では、最低賃金に相当するメザードがもらえれば、間作のほうで儲けが予想されるからコロノでもやっっていける、ということになるからである。

さて、ここで現在の日本人シテアンテの営農全体をみわたすと、コーヒー園の三分の二、あるいはそれ以上を歩合作者——ポルセンティロ——にわたし、家族のものは、ボランテ（カマラーダ）をつかって、残りのコーヒー園、果樹、養鶏、養豚などにたずさわっているのが現状であることをしる。それは、奥地的コーヒー園の監理とサンパウロ近郊的農業とを組み合わせたような多角農をいと

なんていることになる。

奥地の非コーヒー地帯

ただし、これは旧コーヒー地帯のことであって、パラナ河に接近した霜害の多い地方や西南地方になると、かなり広い面積を、ボランテをつかって機械化農をいとなんでいるものがあらわれている。綿、米、とうもろこし、大豆などの産地がそれで、近来ではラミীর栽培もさかんであるし、新開地になるとはっかの栽培もいぜんとして行なわれている。ある銀行家の説によると、金の動き方からみて、北パラナの経済はコーヒーのつぎは綿花、そのつぎははっかではないか、ということであった。

ここでもポルセンティロと称する歩合作者が多数活躍しているが、彼らは作物の種類のせいか、コーヒー栽培地のポルセンティロとは、かなりちがった形態をとっている。すなわちポルセンティロそのものが事業家であって、多くのボランテを使って仕事をしていることである。

地代のかわりに収穫物の三割から四割を地主におさめる。むろん、土地の「あらおこし」（トンバーダ）を地主がうけもつようなときは、それだけ請負者のほうの取り分が少なくなる。また、地主が機械をつかわせて、肥料や農薬

を供給する場合は地主のほうが一〇パーセント、請負者のほうが四〇パーセントというふうにもなる。ラミー栽培などでは、この割合が普通だといわれている。

地主のほうでも、すべての土地を請負者にわたすのではなく、自分でもボランテをつかって仕事をしている。ここでも小農あるいは小地主は、自家労力にポルセンティロ（歩合作者）およびボランテ（賃金労働者）という組み合わせでやっているが、新地帯のほうではまだ果樹、養鶏、養豚はそれほど一家の全労力をかたむけるほどにはいたらない、そのかわり、肉牛のほうをはじめているものもいくらかある。

今後の行き方に対する諸問題

ところで、コーヒーを主として農業をいとなんできた地方では、あたりはずれの多い単一作から、多角農へうつろうとしているが、シチアンテとして平均一五アルケールくらいの土地では、何と何を組み合わせた多角式がいかかが問題となっている。そこで現在では、二つの問題が小農に課せられている。すなわち、ぶどうでもパイナップルでも、加工をとまわらないかぎり、生産過剰でいきづまめることは目にみえている。しかし、加工までもっていくためには、この地方に最も適し、しかも小農の所有面積をい

かに有利に使用できる作物であるかが問われなければならない。多角農ならなんでもいい、というわけにはいかない。まだいままでの主産物のコーヒーは残しておきたいという気持ちがあるからコーヒー園外の利用できる土地で何をするか、いわば立地条件にしたがった多角であつて、作物も家畜も種類の組み合わせがたいせつだ。肉牛などはとてもものぞめない。

もう一つは労力の節約をはかつて、できるだけ機械耕作にもっていくことがたいせつである。すでにある農場では、機械を購入し、時間があまれば、他農場の耕耘作業の請負仕事をやっているものもあるので、機械を購入する資力のないもの、購入しても採算のとれないものは、他人にこの荒仕事を請け負わせている。また、ときには小型耕耘機を購入して、自力でやっているものもあるが、これも果樹園やコーヒー園では役だつとしても、少し手びろにやろうとすれば、中途半端な機械である。

そこで数家族が、共同耕作でやるほうが仕事も早く、経済的ではないかというので、コチア産組ロンドリーナ単協などでは「共同生産グループ」を立案し、共同出資によつて機械の購入をはかろうとする気運をかもしだしている。いままでもトラックやトラクターの競争購入で、ずいぶんむだな費用をつかつてきたが、現在では、機械の種類も多くなつて、もはや各個人が買いこむことなどはと

ても不可能になってきたのである。むろん、ここでも加工の問題があとを追ってくるが、とにかく、小農が、自家労力を主体として、くそ働きする時代は遠くすぎてしまつたし、現在の雇用関係による生産方法では安定性がない。なんとか現状を打開する方法はないものかというのが現状である。

農家の生活に、まだどこことなく落ち着きが欠けている理由は、いま農家一般が、今後の発展のためには、どのような営農形態にうつらねばならないかに迷っているからだといえるだろう。

小農は今後どこへいくか、近代経済機構の複雑なからくりのなかで、実質的には賃金労働者とかわりない生産者となっていくか。それとも中産階級的な存在として農村に安定した経済的地盤をきずき、子弟を教育しながら文化生活をたのしむようになるか、全く岐路に立たされた時代だといえる。

もし一〇アルケールや二〇アルケールの土地を子供たちに分配するとしたら、うけつぐものにとって、財産というほどのものにはならない。過去六十年の歴史において、日本移民は、ただ生きてきたにすぎないということになるだろう。

しかし、物質的成功だけが成功ではなからう。われわれはここで、二世たちの成長に目をやらなければならぬ。

二世の成長とその教育

日本移民は集団地を形成すれば、まず日本人会を組織し、その第一の事業として小学校をたてた。戦前の日本移民の最大の関心事は、子弟に日本語教育をほどこすことであった。それはまだ錦衣帰国の思想が念頭から去らなかつたからでもあるが、戦前の一世移民にとって、教育は日本語による教育以外に、考えられなかつたからである。かくて、戦前のコロニアにおける最大の事件は、日本語学校の閉鎖だったのである。

戦後、帰国主義から永住主義に変わったとき、ブラジルの社会へでていく子弟が、教育のある人間として、社会的地位をえ、ブラジル人から尊敬される二世、三世であることをねがうようになった。

日本人の教育熱心は、戦後のコロニア社会の混乱期には、やや冷却したかにみえたが、生活が落ち着くにしたがつて、再びその熱心さをとりもどした。今日、北パラナで小学校をたてる運動には、日系人が先頭にたたなければ実を結ばないといわれている。農村に小学校がほしいという。日本人なら敷地を提供するものがある。寄付もだす。日本人が運動しているなら、郡役所のほうでもなんとかしよう、というので学校建設は実現するといわれている。

農村から、年々住居を都会にうつす日系人がふえるのも、子供の教育のためである。

ロンドリーナには、現に四つの単科大学―法科、齒科、文理科、経済学科―がある（ちなみにマリンガーには齒科と経済学科とがある）。いま、日系学生の数は一〇パーセント以上の日系在学生在があるのが普通であるから、ここではそれ以上とみてもいいだろう。数字は古いが、一九六五年の『パラナ新聞』の“パラナ発展録―日系抄”によると、クリチーバのパラナ総合大学工科の同年の入学試験合格者二百七十四人中日系は二十八人であった。ロンドリーナが一〇パーセントを下らないと推定してもまちがいないであろう。ただパラナ大学では、同年の農学部の日系人学者のパーセンテージはややひくい。アブカラーナ農学校は中等程度であるが、今年創立十周年であり、初期には九〇パーセント以上が日系で、舎監も日本人であった（現に校長も日系人である）。これは四年制で、農村青年実習学校のようなもので、卒業者は帰省すれば、すぐ農業にたずさわれるのである。

現在中学校に通っている日系人の数は相当なもので、たいがいの農家では、子弟を中学に通わせないところはないくらいになった。例外的ではあるが、ある中学では三分の一が日系というところもある。そして一般

に中学から高校へいくにつれて、日系人の比率は案外高くなるという。これは、中学が義務教育となっている日本などとは比較を絶するもので、今日あらゆる地方都市に中学ができたことにもよるが、なお、無学文盲の多い農村で、もし大学へやれないなら、せめて中学だけでもと努力している親たちの心がけを察してやらなければならない。これからは、たとい農業をやるにしても、中学程度の教育がなかったら、最低の労働者にしかなれないことが、親たちにもわかってきたからである。日系人でカボクロになりきがつたものがごく少ないのは、移民一世時代からの教育熱心のたまものといっていいたいだろう。

いま、北パラナ地方をみまわって、各地に二世識者の多いことに気がつく。

これを政治活動の面からみると、郡会議員のいないところは少ないし、一九四九年には、その第一号が、アサイーとカンベー市にでていいる。市長第一号はイグアラスーおよびボン・スセツソ市にでていいるし、現にウライ市長は日系である。副市長をだしているところもある。州議員も数人おり、連邦の下院にも二人でていいる。その他官吏としては、一九五五年にカンベーの裁判所検事に任命されたものがあり、地方視学官で、マリンガー経済大学の教授に任命されたものもある。

しかも、右にあげた日系人たちは、数年前の資料によるものであつて、今日は、もっと各方面に多くのものが進出しているはずである。また二世では、政治家や官僚以外、自由職業に活躍しているものはその数倍あつて、医者、歯科医、弁護士、建築家、計理士など、どこの町へいっても何人かみいだされるし、堂々たる病院を経営しているもの、建築会社を組織して“庶民の家”の建築販売を行なっているものなどがかなりいる。こうした建築事業などは、一世の職業分野からぬけだしたものである。

さて、商業方面に進出した日系人が現在どのくらいの実力があるものか、ここであきらかにしえないのは残念だが、農業移民としての日本人は、過去六十年の歴史において、物質面では必ずしも他の国の移民にまさる成功はかちえなかつたが、そのかわり、文盲者の出現を最少限度にいくとめ、貧しいなかにも子弟の教育につくして、多くの教育ある二世ブラジル人を社会に送りだすことができたということである。これを数字的な正確さをもって示すことができないのは残念だが、どこの農村をのぞいてみても、子弟の教育を全く無視して、金儲けだけに盲進した人間は、いたって少ないことによつて確信をえるのである。自分は無学な百姓だが、せめて子供には学問をさせたい、という日本人の気持ちは、伝統となつていままで、老一世から準二世へとながれていることがわかる。

二世の政治運動

この一九六八年十一月十五日には、市長および郡議の選挙があるので、北パラナはいまや、選挙運動期にはいつている。二世ばかりではなく、一世でも選挙権のあるものはみな熱心である。むろん選挙権をもっているかどうか、うたがえばうたがえるような人間も動いている。

しかし、だれもそんなことはせんさくしないようだ。こういう人間は、投票権も被選挙権もないのだし、おそらく「友人の息子」とか「親戚のもの」とかのために、頭をさげたり、ビラをくばったりしているのだろう。「何何氏後援会」などという組織もあつて、老一世有権者がずらっと名前をだしている。州内の日系有権者は、一九六六年において推定三万五千名といわれたが、今年はどれだけ増加していることか。とにかく、州知事選挙を左右するだけの幅をもっているのだという。地方の日系有権者の大多数は日系候補者に投票し、日系候補者はほとんど与党であるというのも興味深いことである。現在のところ、与党でなければ仕事ができないう。むろん与党ではあつても、いつも数人が議席をあらそうので、だれをおすかによつて、コロニア内にも候補者をめぐつて対立ができる。

「有権者が年々ふえて、コロニアから政治家がでるのもいいが、われわれの社会がまた分裂するのはどうもあり

がたいものじゃない。われわれは戦後苦い経験を味わっているからなあ……」となげく一世もいたが、この候補者をめぐる分裂だけは、ブラジル社会で当然おこるべき現象であつて、やむをえないことだろう。コロニアだから「打って一丸」というわけにはもういかない。

二世の結婚問題

二世の結婚を問題にしているのは一世である。二世の親兄弟である。まだ日系社会という一つのつながりは断たれていないので、日系同上の結婚が多いことは当然で、むろん、これは一世である父母たちの望むところである。

都市では自由恋愛結婚が一般的であるが、家庭間のつきあいによつて、おたがい生活程度にあまりへだたりのない者同士がむすばれる傾向がある。だから、有力者は有力者間で縁組みするということになる。

だが、植民地などでは、まだ「紹介結婚」は決してすたれていない。しかし紹介者は、必ずしも「仲人」ではなく、祭りのとき、運動会のとき、弁論大会のとき、誕生祝いのとき、親なり、友人なり、学友なりが紹介する。

また、パウルー放送局では文通のための仲介をしているので文通から交際にはいり、やがて結婚にまでこぎつけた例がいくつかあると報告するものがいた。おたがいにブラジル内の日系人同士なので「文通結婚」がとくにトラ

ブルをおこすことはないようである。

日本的な「仲人婚」がなくなったとはいえないが、今日ではごく少なく、しかも一定の交際期間のちに本人の意思によってきめるのが普通である。

都会では、ナモーロ（つきあい）からノイバード（婚約）にはいれば、家庭的に交際することになる。婚約期間はいろいろだが、たいがい半年以上であるのは、二世たちの生活に対する考え方がブラジルのためであり、また堅実であることを物語っているようだ。

日系人以外のものとの結婚については、一世の意思として「のぞむところではない」のが普通であって、ただ、いよいよ息子や娘が結婚の意思を伝えてきたときに、精神的に深い打撃をうけるか、なんとかあきらめるかの差はある。しかし、昔のように、「世間に対してあわせる顔がない」とか、「先祖様にすまない」などと考えるものはなくなった。たいがい、割りきれない気持ち、あるいは、かわいい子供が自分から離れていくようなさびしさのうち、あきらめをもって承認するのが大多数である。「わしは、はじめから覚悟していた」などと自慢するものもいるが、「そりゃあ、あとになっての強がりさ」と苦笑する人の気持ちのほうが真実に近い。

二世同士は学校時代から、ブラジル人の社会で自由に交際しているのであるが、一世父兄はあいかわらず孤立し

て、子供たちの生活からもかけはなれている点が多い。それで、だれがどこでナモーロしているか全然知らないでいる。だから、心の準備期をもつことがない。ことに「自分の俸に限っては」などと考えている親ほど、打撃も大きいのである。

「日系外のもの」と結婚した二世の、その後の生活はどうであろうか」という問いに対して、「ヨーロッパ系ブラジル人と日系娘の結婚はおおむね良好。二世青年とブラジル娘との結婚は、まだ半数くらいはうまくいっていない」と評するものがいた。おそらく、かなり誇張した一世的評言であると思うが、日系娘のほうは、ブラジル人と結婚すれば、すっぽりと夫の生活にとけこんでしまうのに反して、二世青年のほうは、日系社会に片足をつっこんで、そこから抜けだそうとしないから、「日本的気持ち」をもちつつける。そして、同じような生活のレベルにあるものよりも、一段とひくい層のものと縁組みする傾向もあって、これが相互理解のさまたげとなる、というような解釈をするものもあるが、他のものは、日系青年のわがままをいい、あるいは肉体関係の不均衡を云々する。とにかく、コロニアの現段階では、まだ問題になっていることだけは事実である。

世代の差と教養のへだたり

さきにも一世の教育熱心についてかいたが、ここには、子孫のため「美田を買う」かわりに「人間をつくる」ために、苦しい生活のなかから子供を教育した親たちが、はたしてむくいられたかどうか、という問題がある。

「教育は投資だ」という言葉がある。おそらく社会一般からみた場合、これは正しい考え方であろう。農業移民としての日本人は、商工に進出するかわりに、子供を教育したりそして、それは今日、目にみえない財産としてのこつた。

ところが、できあがった人間は、必ずしも親たちが期待したような人間像にあてはまるものではない場合もあった。これは、弟のため、妹のために「犠牲」になった初期の二世たちにも同じことがいえる。当時は、学校といえば日本語小学校であった。自分たちは、父母とともに、やがて日本へ「帰る」つもりであった。日本語学校をでると、十四、五歳から鋏をかついで「ヤマ」の仕事にでた。しかし、世の中が変わって、いよいよこの地に永住することになると、せめて弟や妹たちはブラジルの学校へやりたいと思った。父母も同じ気持ちだったから、みんな、弟妹の教育のために働いた。しかし、彼らがブラジルの学校をでてブラジルの社会をしり、ブラジル人と交友関係をもつようになった現在では、自分たちに対して、なんとな

くよそよそしい態度をとるようになった。

「こんな田舎ものが、兄だ、姉だということを、ブラジル人にしらせたくないような態度をとる。弟や妹たちは、どうして自分が学校にいったのか、考えたことがないのだろうか」となげくものをみた。おそらく、これは特殊な例とはいえないようである。

父母に対しても同じで、娘は母親を母親として他人に示すことを心よしとしないことがある。父親に対しても変わらない。あるブラジル人と結婚するようになった二世娘は、ついに自分の父親をその席に招待しなかった、という極端な例もあるし、学校の卒業式に出席した父親に対して、最後までよりつこうとしなかった息子もあった。

「倅もいよいよこれでドウトールになる。長いあいだの苦労もむくいられた」とよろこびいさんで、わざわざクリチーバ市まででかけていった父親が、卒業式場にはいつていくと、どこの親子も、うれしそうに抱擁しあっているのに、自分の倅だけは、いったい、どこにいるのやら、ちらつと姿はみせたが、なにかせわしそうにして、寄りつかない。とうとう式が終わるまで、顔をあわせる機会をつくってくれなかったというのである。

親の気持ちを察してみれば、「パパイ、よくきてくれた」といって、他の学生たちと同じように、抱擁してくれる息子を期待していたかもしれない。あるいは、ジャポ

ネースでも、ドウトールの息子をもつようになったのだ
ということ、ブラジル人にみてもらいたかったのかも
しれない。しかし、息子にしてみれば、いかにもやぼった
いカイピーラ・ジャポネース丸出しのとつつあんを自分
の父だと他人に示したくない気持ちがあつたらう。

もしそれをあえてする息子であつたら、偉大な例外で
あつたかもしれない。しかし、親は、当然、自分の孝行息
子に、それを期待していたにちがいない。これも程度の差
こそあれ、必ずしも例外的な傾向とは思えない。そして、
こうしたことがおこりうることに考えおよばなかつた一
世父親の気持ちはあわれである。

「どうしてもつとしゃんとした身なりででてこられなかつ
たのか。母や姉たちは、大学の卒業式に出席する父に対し
て、人前にでてははずかしくないようにとりはかること
ができなかつたのか。自分はこれから、ドウトールとして
ブラジルの上流社会の人たちとつきあうことになる。そ
れには父母の家庭も、それなりに教養のある人たちに
よつて営まれていることを示さねばならない。あのとき、
あの親父を人前に連れだしたとしたら、わしはこんな父
親の息子だ、といつて、彼らとつきあう資格はないことを
宣言するよなものではなかつたか。もしそうだとした
ら、なんのために大学まで学んだのか。まことに具合の
わるい話だが、あのときは父親には遠慮してもらわねば

ならなかったのだ」

そんな考えもわいていたのではなからうか。

世代の差、教養の差。一面非難に値するような例外的事実でありながら、ここには一世的な考え方と二世的な考え方の差も、世代の差とともにあらわれているように思える。それをほとんど理解できない父母。また、こうした面によって、二世の態度を批判しようとする一世のメンタリティーのなかに、筆者は、なにか移民の宿命のようなものをみせつけられる思いがするのである。

寺院、盆おどり、その他いろいろな「会」

コロニアにおける戦後の一特長は、それまでの天理教会や生長の家の集会所のほか、各所に仏教寺院がたつたことである。そして、そこで毎年催される「盆おどり」は、ブラジル人の間にもしれわたって、その日になると、各地から見物にくる人の自動車で門前や寺の広場がいっぱいになる。ロンドリーナの西本願寺、アプカラーナ、マリンガアの南米本願寺などは、とくに名高い。

ここではアプカラーナの盆おどりの情景をえがいてみる。

寺の入口右手に鐘楼がそびえ、大きな梵鐘がさがって

いるのがまず目につく。そのさらに右手の広場が、今夜のおどり場であるが、中央には、大小の太鼓、横笛などのおはやし組が陣どるやぐらがあり、幅一五メートルに奥行き三〇メートルくらいの広場のまわりは、豆電灯をともした提灯が、ぎっしり二段につられているが、これを覆う天幕のおかげで、一大屋形船が川べりにひきよせられたような観だ。数百の色とりどりの提灯が夜風にゆれてにぎやかである。はやしの調子も上々。ブラジル人はサンバとまちがえるかもしれない。ドンドコ、ドンドコ、ピーヒャララ。おどりには若い男女の多いのが当然、おそろいのゆかたに男ははちまき姿。今夜はあまりブラジル人の顔はみえないが、みんなが輪になって、やぐらのまわりをおどりまわる。ジョンも花子もアントニオも、おどりは世界共通と、無心におどる姿はほほえましい。

キリストの国でたのしい盆踊り

青い目も混りておどる盆踊り

これは以前新聞にでたドラセーナ邦人たちの献句である。

少し風がつめたいので奥の接待所へ避難した。お茶、まんじゅう、こぶまき等のもてなしにあずかる。だれかが、盆おどりの由来を述べていた。

「ごぞんじではありませんしょうが、そもそも盆とは孟蘭盆会（うらばんえ）の略でありまして……」おしゃか様から救

われた人たちのよろこびをあらわすものだ、という意味のことであつたようだ。

ここにいても底力のこもった太鼓の音が体をゆすぶるようにひびいてくる。この接待所には、おとしよりの人たちが休んでいる。若い人たちが嬉々としておどる姿が接待所の窓ガラス越しに見える。フェスタ（祭り）だけは信徒であろうとなかろうと、遠慮なしに集まっているようだ。ここへくればナモラードもみつかるかもしれない。おばさんたちの日本語にまぎって、若い人のポルトゲースがとびかう。

いそがしそうな接待係の人にちよつとあいさつして外へでる。境内をぬけでると、前の暗い空地にはまだかなり自動車がつまっていた。今夜もセツカの空に星がまばたいている。

盆おどりのことをかいたついでに、いま二世もふくめたコロニアの人たちが、どんな集まりをもっているか、ちよつとふれておく。

どこへいっても、寺院やその他宗教的な集会所があるように「文化・体育協会」と称するものの「会館」がある。「クワイカン」といえば、ブラジル人でもしている。そこには老一世たちの日本人会、青年たちの社交・運動クラブが同居し、サロンは演芸会、のど自慢、ダンスパー

テイ、結婚披露宴などにつかわれる。このときの収入や借料が、会費とともに会の維持費になるわけである。会館を使用するときの「会」や催し事は、たいてい大げさなものであるが、単なる会と名のつくものをあげてみると、ロンドリーナだけでも二百くらいあるだろうといった人があ

る。まず、日本人会（文化協会）を筆頭にあげてかぞえてみる。野球連盟、ピンポンクラブ、教育会、仏教会、俳句会、川柳会、短歌会、釣同好会、囲碁会、将棋会、民謡同好会、明治会、県人会、ラン同好会、写真同好会、母の会、友の会、……あらわれてはきえ、有名無実となったかとおもえば、また集まるというような会の名をあげたら、もつともつとふえるだろう。協同組合や二世の政治団体のようなものははぶいても、よく数えたら、二百はは（、）ら（、）としても相当の数になるだろう。これはコロニアの歴史とともに、いろいろな層、職業、宗教、趣味のグループができたことを示すもので、コロニアの成長といつていいかもしれない。

冠 婚 葬 祭

二世たちの結婚式が、多くはカトリック教会であげられていることは、サンパウロ市もパラナ州の諸都市も変

わりがない。植民地へはいれば、三三九度もあるが、披露は、町では会館、田舎では天幕というところ。そして、どこでも大げさである。日本人のカザメントはブラジル人の間でも名高い。でも近ごろは、不景気のおりから、費用節約などがさげばれ、会費制にしようと申し合わせた団体などもある。誕生祝いのはすでにかいた。葬式も若いものときはカトリック的、年よりは仏式が多いといわれる。でも一応カトリック教会で告別式をやり、墓地へは坊さん同伴、仏式の埋葬もするという。これは教会で結婚式をあげ、家へもどると、もう一度三三九度をやって披露宴にうつるというのと同じ行き方で、おそらく一世と二世との両方の気持ちをくんでのことであろう。こうしたことも統計によらなければ、正確なことはいえないが、二世の成長とともに、年々カトリック的な冠婚葬祭が行なわれるようになることは自然であろう。

家庭 生活

家庭生活は、一世が主になっているところ、一世と二世が同居しているところ、二世だけが別居しているのとは、それぞれ生活様式がいくらかちがっている。しかし、もう一世だけのところというのはほとんどない。一世が主となっているところという意味は、未婚の二世がいる

ということ、一世と二世が同居しているというのは一世の老人たちのいる家のことである。

日常使っている言葉のうえでも、一世が主となっていれば、二世も日本語をつかう。一世が老人だけなら、一世と二世は日本語で話し、二世の親と三世の子はブラジル語をつかい、二世だけの家庭では、ほとんどブラジル語とということになる。

ただし親子が日本語をつかうところでも、それがどの程度の日本語なのかその判別はむずかしい。すでにわれわれ一世は、ながいこと日本の外にあつて、どんな言葉が正しい日本語なのかもう判断がつかない。ここで日本語というのは「コロニア語」であつて、メーザ、カデイラ、プラット、ガルフォ等の名詞をつかい、コーメする。センタする等の動詞を混用する日本語であつて、われわれには親しい言葉ではあつても、日本では適用しない日本語であらう。

食べ物には日伯混淆。しかし、白い日本御飯にブラジル式フエイジョン（豆）というように、両方つくつて食べるということであつて、だいたいからいえば、御飯、味噌汁、漬物にフエイジョン、カルネ（牛肉）、サラダを適当に組み合わせたもので、この混淆様式は、いまやほとんど固定したようである。これが二世たちだけになると、味噌汁や漬物のかわりにスープやサラダが多くなるが、白い御飯は

あいかかわらずたべている。

この点、一世にはなくてならない風呂のようなものは、都会の二世には、だんだん必要なものではなくなっている。しかし、二世でも寒いときは「やっぱりお風呂はいい」といつているものはまだかなりいる。

外面的な生活様式は変わっても、われわれ一世が、ときによるとはっとして目をみはるのは、「なんて親子いうものは、そのジェスチャーや身のこなし方が似ているのだろう！」ということである。こういうことを感じるとき、われわれ一世は、二世たちがブラジル語を話し、ブラジルの生活様式をとりいれていても、どこかで日本人的な気持ちはもちつづけているにちがいないと思う。無言のうちに親たちからゆずりうけたものは、一朝一夕には消えさるものではないようである（ただし、一世の生活態度といえども、厳密にいえば、そのまま日本的なものだといえないだろう。われわれのジェスチャーや身のこなし方と新来の日本人のそれとをくらべてみれば、明瞭にそれが指摘できる）。

最後に、さらに奥地の町を……

奥地といっても、ここは開拓十七年目。パラナバイーの奥、パラナパネマ河よりの小さな町、テーラ・リツカである。

小さな町だけに全体をみわたすことができる。ここの町の現勢を叙述し、北パラナの生活の現状観察のしめくりをしようと思う。

テーラ・リツカ市は、まだアスファルト舗装のないただっ広い幅三〇メートルの一本道であつて、街路の中央に、車道を二本にわけて電柱が立ちならんでいる。この本通りは両がわにむかでのように枝路をのばしているが、そのわき道は中心部が十四、五軒になつていて、そのほかのところは四、五軒どまり、裏通りは住宅地で家もまばらでさびしい。

三分の一くらいまだ板の家があり、二階建ては、ただ二軒である。こうした街路の姿は、開拓初期には、どこの町にもみられたものである。ただ中心部の舗道がセメントになつている。トラック、ジープが多く、馬車もみられる。自動車も動いているが、ときたま乗馬の人がとおるのはいかにも新開地らしい。

人口は郡全体で三万以内、そのうち日系は六十家族。

市内は六千丘百人、日系は約三十五家族といわれている。

この小さな町でも日系の商店はかなり多い。数えあげれば、コーヒー精選所二、精米所一、映画館一、食料雑貨店六、薬局三小間物屋二、バール（アイスクリーム店二軒を入れれば）七、自動車部品店一、写真屋一、パーマ一で、それに銀行員が四人いる。しかし、日本人経営のホテルが

ないのは、もうそれほど必要としないからであろう。

ちなみに日系有権者は郡内で百人ほどあって、今度郡議に立候補した日系は、おそらく当選確実だろうといわれている。

この町にも、州立中学があり、師範（中学程度）学校がある。中学も師範も三分の一は日系だといわれる。ここから大学へ通っている日系学生は、クリテーバの商夫へ一人、プルデンテ（サンパウロ州）の文理大へ一人、パラナバイーの文理大へ一人、合計三人である。

非日系人と結婚している日系人は、ブラジル人の女と結婚している二世が五人、ブラジル人の男と結婚している日系女性が四人であって、そのなかには、町の有力な医者の妻になっているものもある。

このあたりはコーヒーの生産地であるが砂質土壌である。むろん日本人会（文化協会）はあるが、会長は町に住居をもち、植民地でコーヒー園を経営している。いま選挙をひかえて運動が盛んである。現在の日系郡議候補は、このパードレのおきにいりで、このパードレは、なかなか社会的に影響をもっている人だという。二世は生活のうえで、かなりブラジル人のなかにくいこんでいるが、一世はあいかかわらず、一世だけの交際に終始している。

町に二つある二階屋の一つは映画館で、日本人の所有、経

営になるものだが、週一回日本映画を上映して日系人をなぐさめている。

ここにも「生長の家」の誌友はいるが、まだ仏教の寺院はない。日系の銀行もない。しかし、もし将来もっと発展したら（まだ見当もつかないことであるが）、もっとにぎやかな町となるだろう。一世はますます後退し、二世がもっとブラジル人の社会にとけこんで、ここをもっとブラジルの都市とするにちがいない。人口六千五百に対して日系人二百たらず、しかも中学、師範学校の在學生（2）の三分の一が日系という町。今後十年、この町を訪れたらどんな変化をみるだろう。

注

（1）『日伯毎日新聞』一九六七年七月二日発表。

（2）おそらく創立はごく近年のこと、在學生も少なく全学級が授業をいとなんでいるのではなさそうである。

78 単一性から多様性への発展

日系人社会（コロナ・ジャポネーザ、略してコロナ）も、戦後の内部的対立闘争を一つの契機として、停滞と発展の様相をあらわしながら、移民社会という単一な

形態からブラジルの社会へとけこむ前提として、多様な動きを示しだした。

二世が大きくなって

第一にあげられることは、二世の成長とともに、一世的な単一的な思想のなかに、一世移民とはかなり対立的な考えをもつ層があらわれたことである。彼らはブラジルの社会や教育の影響を深くうけて、ブラジル人としての意識をもち、父兄一世をして、永住の方向へむかわせることになる。ながい集団生活のなかで、日本人としての二世を育てて、ともに帰国することをねがっていた一世たちは、「こうしたブラジルに根をおろした二世をつれて、「いまさら日本へ帰ってどうしようというのか」という反省をうながされることになったことである。

土地がやせて

それから一世の社会自身、いわゆる第一期的な植民地が、その略奪農法のおかげで、地力減退の時期にさしかかっていたが、戦後、枢軸国移民に対して土地売買の自由がゆるされるようになると、多くの人たちは、パラナやマツト・グロツソ諸州の新開地へ向かうか、それともサンパウロ市近郊の集約農へいくか、あるいは土地を処分したら都市へでて商・工業に進出しようか、いろいろ思案し

ていたときであった。

勝ち負けの争いもあつて

そこへ植民地内部でも、勝ち負けの相克が、いつはてるともなくつづいて、いままで移民として団結してきた社会に、相反目するいきぐるしい雰囲気をかもしだすことになり、植民地脱出の気運をもたらしただことであつた。

このころ、一方では当時北パラナ州は、一九三二年のコーヒー植付禁止令をよそに、コーヒー栽培の新適地として、めざましい発展をみせはじめていたし、サンパウロ近郊は、都市の工業化がすすんで、人口は爆発的に増加し、トマト、じゃがいも、果実の消費量がふえて、もはや「ブラジルまできて、あんな都会近くのやせ地にかじりつく人間の気がしれない」などとあなどられる理由はなくなつていた。

教育の目標もかわつて

二世たちは、戦後の民主的憲法のもとで、選挙の際は数十人の「郡議」をだし、やがて州議員、連邦議員と政界への進出もあらわれてくると、教育はもはや、植民地内の日本語教育くらいで満足できるものではなくなつてきた。中学校、高等学校、大学のある都市へうつつて、百姓で成功しなかつたものは子供の教育でこれを取りかえそうと

する。また成功したものは、子弟を都市の宿舎へ送って教育し、いままで移民としてブラジル社会の下積みになっていた身分から、ドウツールを子供にもつ親となって、社会的地位の向上をはかりたいと思うものもでてくる。

こうして、サンパウロ近郊へ、中央や地方の都市へと移動をはじめるのであった。

自由な選択ができて

しかも言葉の不自由な新移民時代とちがって、知りあいのものがあるから、同県人の集まりだから、あるいは日本人の植民地だからといって、それをたよりに移転さきをきめるようなことは、もう、それほど必要としなくなつた人たちがふえてきた。もし必要なら、気の合った者同士が相談してうつつていけばいい。都市なら、むろん・家族だけが離れていく。

むろん、まだ日本人同士がたよりあう気持ちは全くなくなっているのではないが、一度自由な気持ちで動きだせば、それがきっかけになって、さらに自由な動きがはじまる。

階層の分化もおこって

こうした初期集団の崩壊から、当然もたらされるものは、経済力の差による階層分化であった。新しいころみ

には、当然多くの浮沈がともなった。旧地帯、たとえばサンパウロ近郊における農業などは、肥料からはじまって農薬の使用、機械化による労力節約などの問題があったが、戦後は、農村における労働者の八時間労働制、最低賃金の実施などもやかましくなってきたので、農業の合理化というものが緊急な問題となってくる。こうして、農業も資金と技術をもたなければ、やっていけない時代が目の前にせまりつつあったのである。

わがコロナでも資本がものをいう時代がくる。優勝劣敗がはげしくなり、成金で浮きあがるもの、失敗で無一文になるもの、浮沈は、無資本時代とはくらべものにならないほどはげしいものとなる。

社会的地位の入れかわりもおこって

戦前には「大成功者もなければ、みじめな貧者もない」といった均等的移民社会も戦後はくずれてしまう。昔のように、病気やその他の理由で、仕事がおくれたり、失敗者がでたりすれば村（植民地）全体の責任として、加勢（手伝い）にでかけたような気風もいまはなくなる。

昔は、日本で村長をしていたとか、中等以上の教育をうけたとかの理由で、日本人会長とか、その他村の顔役にまつりあげられ、領事館などに出むいては学校建築その他の寄付金下付に骨を折れば、植民地の人たちの尊敬をう

けて社会的地位を保つことができた。ところが、このころになると金のある人間が社会の上層におしあげられ、顔役となり、土地の指導者ともなった。貧乏つづきでは発言権も失われるのである。

こうした地位の入れかわりを、戦後の混乱を利用して獲得しようとしたものもいたが、そういう一時的なエスペクラソンも実力の前には意味を失ってしまふ。

新しい方向への動きもあつて

単一的社会の崩壊とともに、単一社会内にあつた地方の協同組合なども、大都会を中心とする大組合の地方支部におかぶをとられることも多くなる。

初期的集団を、あくまで維持しようとしてとなえられた「愛土永住」の主張も、集団の崩壊とともに意味を失う。

コーヒー栽培、綿作、養蚕、養鶏というように好景氣をおいながら作物や産業を変えるにしたがつて、適作地への移動や中央の大組合との連絡に便宜をみいだすようになるからである。

発展の意味もかわつて

むろん、あくまで日本民族の純粹性をまもりながら、移住者的単一性を固持しようとした集団ものこつたが、そ

ういう集団は広いブラジル社会へ発展しようとする意思を欠くために、停滞に停滞をつづけて、いまや消滅の一手前にきてしまった。こうした単一社会の停滞は、カボクロ化への道となった。

日本民族の純粋性をたもちながらカボクロ化するか、同化の方向へ積極的に動き、ブラジルの社会へとけこんで発展するか、いまにいたって、かつては、かがやかしい民族発展への道は、カボクロ化への道となり、カボクロ化がうれえられた同化への道には、多くの未来が約束され、かくて方向は逆転する形となるのであった。

しかし、これは一つの見通しであって、むしろ、ブラジルの社会へとけこむ方向にむかうものが、すべて成功するとはいえない。ただ、地域的に職業的に限定された移民社会は、ブラジル人の社会と近似的な多様性をそなえて、ブラジル社会の成員となってきたことを示すもので、こうした傾向をとるものなかにこそ、多くの将来性は約束されているということである。

発展のための必然的多様化

だから、コロナの発展ということは、もはや日本民族の発展というような単一的な考え方では割りきれない時代へ向かいつつあるということである。そこには「コロナ

アの分裂」とか「二世の離反」とか、いろいろ、一世の「移住者的気持ち」あるいは「一世的感傷」と相容れない姿をみいだすのであるが、これはすでに日本移民がブラジルの社会に、しっかりと根を張りだした姿を示すものであつて、もとの単一的な社会へひきもどすことは、不可能な状態となつてしまったことを証明するものである。

これをコロニアの単一性から多様性への発展と筆者はみるのである。

79 エピローグ

一九六八年六月十日、筆者は、わが移民六十年祭を八日後（十八日）にひかえて、いまこの移民史のエピローグをかこうとしている。

おそらく、これからも、あれや、これや、補充しなければならぬものもでてこよう。しかし、自分の才能をかえりみて、手のつけようのないものが、たくさんのごさされている。美術方面のことはともかくとして、文芸、スポーツ、経済など、系統だてて記述することができなかつた。コロニアの生活のなかで興味深いジャーナリズムの動きについてもこまかく分析することはできなかつた。組合運動についてはほとんどかかなかつた。美術、文芸、ス

ポーツ、ジャーナリズム等は、ぜひ独立の文化史としてだれかにかいてもらいたいと思う。農業史は、経済や組合運動をふくめて、別個にまとめてもらわなければならない。

この移民史では、サンパウロ州以外は、北パラナとマト・グロツソに、わずかばかり筆をのばしただけである。アマゾンには全くふれなかった。北東地方の戦後植民についてもかかなかった。

こう考えてみると、私の雑文も、ごくせまい範囲の、しかも限られた生活面をとりあげてかきつづけたにすぎない。しかも、日本移民の生活のなかのもっとも微妙なもの、集団内のこまかな精神的結合のしかたや、宗教的な動き、その他、外部ブラジル人社会との接触や境遇の変化による心理的ならつりかわりなどについては、確信をもつて記述することができなかつた。

私がこの移民史をかきだしたころ、「いまはまとめるというよりも、資料を集めておくことがたいせつだ」という意見があつた。たとえば、古い移民たちは、日一日とこの地上から姿を消していく。彼らの経験を、彼らが生きていくうちに記録にとどめておくことが、緊急な仕事だ、というのであつた。このことは、いまなお緊急な仕事としてこされている。私は友人のすすめもあつて、自分にできるだけのことをやってきたにすぎない。

移民史は、だれか一人がかけば、それで事がすんだとい

うようなものではない。移民史研究所というものが永続的に存在して、資料収集やその編纂をつづけることが必要である。

最後に、この移民の生活の歴史をおわるにあたって、私のとってきた一貫した立場を示すことにしたい。私は移民の子として、あくまで移民の側にたつてものをいつてきた。封建制社会の崩壊と近代資本主義の成立およびその発展過程のなかで、祖国をはみだし、しかも移住先の近代化のために働くことを余儀なくされた移民の運命のなかには、善悪を超越した人間的な悩みがあった。それは一口に、同化過程という言葉で表現される。あるとき日本のジャーナリストは、われわれ移民の心理的な面を「二人」という言葉で表現した。日本人でもなければブラジル人でもない。しかも両国人の性格の一部をかねそなえているという意味だろう。この「二人」という言葉は、どこかにコミックな、戯画的な感をもっている。戦後、これはブラジル・ボケともいわれた。どことなく、トンチンカんな移民の姿は、戯画の好材料となりうるだろう。その最も代表的なものは、戦後、勝組の永久帰国者の群れが日本へ上陸したときの日本ジャーナリズムの態度に示された。ここで移民は完全に漫画上の人物となった。だが、移民史の筆者は、そこにかくされた移民の悲劇をみるので

ある。

クリストはマグダラのマリアをかばうとき「罪なきものまず石もて打て」といった。この言葉をきいて、マリアを罰する自信と勇気をもつものは一人もなかったという。しかし、移民の「無知」に対して、多くのものは嘲笑の石をなげつけることを躊躇しなかった。こうした冷酷な社会に対する内心の怒りは私をして移民史をかかせる一因ともなった。

しかし、人間はいつまでも矛盾葛藤のなかに生きられるものではない。また、移民の郷愁がいかに強くとも、現実の生活を無視することはできない。自分のいまたっているこの大地に、愛情と責任を感じるにしたがって、心は落ち着いてくる。子孫はブラジル人として成長しつつある。一世父兄の意思とはべつに、土地の人たちと婚姻関係をむすび、土地の人間として、学生運動や政治運動にもたずさわる。彼ら二世、三世たちは、現在なお一世たちのきずいた経済的地盤のうえにたってはいるが、一部のものは、すでにブラジル社会のなかに身を投じている。こうした動きは、いやおうなしに、親たちの民族中心的意識に対して反省をうながすものとなっている。

日系人社会は、今後どのような方向へすすむか、どのような経路を経てブラジルの社会へとけこむか。いまは、その大体的見通しのつくところまでできている。

われわれ移民六十年の歴史は、ブラジル国民形成の歴史の一面でもあるが、その過程には、移民受入れ国でなければみられない人間的悲劇がひめられていたのであった。

(おわり)

用語解説 (ABC順)

アルケール (Alqueire) 本当はアルケイレであるが、日本人はみなアルケールと誤っている。慣用にしたがって本文もみなアルケールとした。

面積 (サンパウロ州) 二・四二ヘクタール (二町四反八畝二十五歩) (ミナス州は倍)

枘目 穀物 四〇リットル

コーヒー (外皮づき) 五〇リットル

ブラジル語 ポルトガル語のことを在伯日系人はブラジル語と誤っている。むろん、ブラジル人はポルツゲースという。本文では、時と場合によって両方つかっている。ただしポルトガルの言葉とブラジルの言葉は、発音のし

かたでも用法でもかなりちがっている。だからブラジル語といえ、ブラジルのポルトガル語だともいえる。辞書名などには「ブラジルにおけるポルトガル語辞典」というものもある。

カボクロ (Caboclo) なまってカボッコ (Caboco) を土人と訳すのはむりである。ブラジルでは土人はインジオ またはブーグレといってカボクロと区別する。土着人となった古い移住者の子孫で、インジオの血をまじえたものが多い。その意味で、土着人または田舎者と訳すことはあるが、むろん適訳ではない。だから、カボクロという名称をそのままつかっている。彼らは商品生産に意をもちいず、自給自足の原始的生活に甘んじている。だが近来は、だんだん流通経済のなかにひきこまれていく。

カイサーラ (Caicara) 海岸地帯のカボクロである。

カマラーダ (Camarda) 元来は仲間とか同志とかいう意味の言葉。本文では、ブラジルの地方的用法にしたがって、人夫、日雇い、日給仕事をする独身、あるいは夫婦ものを指す。純然たる農村賃金労働者である。

ボランテともいう。

カンテラ (ランパリーナ) 高さ一二センチほどのガラス

壇にブリキのどつてをつけたもの。ほやなしである。

コーヒー農場（ファゼンダ）でつかい、植民地でも入植当時はつかった。貧農やカボクロはいまでもつかっている。われわれはまもなく筒ほやのランプにかえ、戦後はアラジンやコールマンになったが、農村電化の進行とともにランプ時代もすぎさろうとしている。



カミニヨン（Caminhão） 貨物自動車、トラック。
カッポエイラ（Capoeira） 土人語から転化したもので、もとの意味はきり払われた森林、破壊された森林であるが、いまでは、荒地、あるいは長年の休耕地、ときには灌木だけの再生林を指す。

コロツテ（Corote） 小さい水樽。労働者が仕事場へ飲み水を入れていくもの。

コロニア（Colônia） 英語のコロニーにあたるが、本文では三つの意味につかっている。第一には、コー

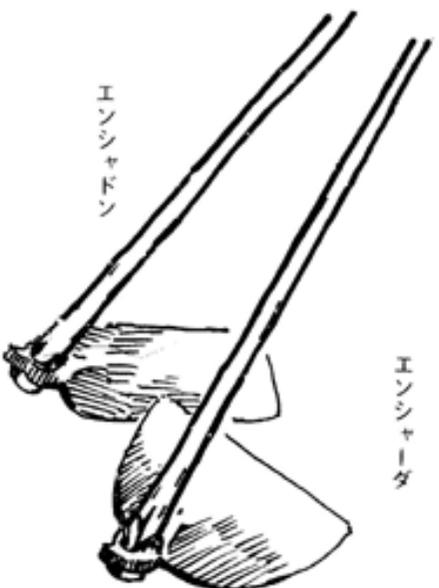
ヒー農場の家族労働者（コロノ）の住む区域がそれで、ここをコロニアという。第二は、コロノは植民とか、農業移住者という意味もあるので、自作農集団地のことを「植民地」といい、コロニアと訳している。第三は、日系社会の略としてのコロニアである。二世、三世をふくめたとき在留同胞とか邦人社会とかいう戦前の名称では、どうも包含しきれない内容をもつようになったからである。

コウベ（Couve） ブラジル人が、むかしから食べていた 葉野菜のひとつで、学名はキャベツと同じであるが、玉にならない。高くのび上がるたちのもので、下のほうから葉をかいて食べていく。近来は青汁の材料として日本人間に評判がいい。西あるいは西南ヨーロッパの原産だという。Brassica Oleracea L. が学名であるが、F. C. Hoehneの本には、Varr, Acephala L. と品種名が記してある。

エンシヤード（Enxada） ブラジルの除草用の鍬。しかし、鍬といえ、日本式の鍬を思いださせて具合がわるいが、他に訳語がないし、在伯邦人も「くわ」といつている。刃わたり二五センチほどで、かまぼこ型。

頭上に柄をすげる穴がある（詳細は「ファゼンダ生活」のところの説明した）。立ったまま足をふんばって除草す

る。いろいろ大きさがあって、三番、二番半、二番などと数字が小さくなるほど鍬の形も小さくなる。幅が一二〇一五センチくらいのせまいもので、穴掘りや土おこしに使うものをエンシャドンという。

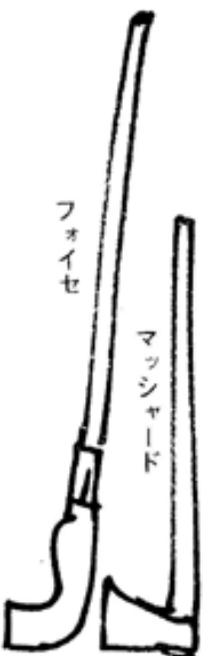


ファゼンダ (Fazenda) 本文では、主として、コーヒー農場 (Fazenda da Cafe) を指すのであるが、ブラジルの日本人は「耕地」といつている。ハワイ移民時代からの用語であろう。まぎらわしい用語なので、本文では「コーヒー農場」または「大農場」とした。なお小農場はシチオ (Sítio) であって、日本人の百町歩内外の農場もブラジルではみなシチオである。郊外の小農園はシャーカーラ (Chacara) という。地主 本文で使っている地主とは、小土地所有者 (百町歩内外) あるいは自作農 (シンチアンテ) のことで、小作に

対する地主、または、地代によって生活する地主ではない。ブラジル語では、小土地所有者 (Pequeno proprietário de terra) である。

フォイセ (Foice) 鉞鎌と訳してみたが、もちろん適訳ではない。一メートル以上の長い柄のついているナタで、先のはうがかぎ型にまがっている。草木を切り払うために使う。

ついでに、斧 (マツシャード Machado) についてもかいておく。ブラジルのものは、刃わたり一〇センチほどあつて、よくといで使う。カボクロたちは小さな細工ものさえ、この斧でやるのである。ブラジルでは のこぎりのかわりに斧を使うことが多い。



マンジオカ (Mandioca) タピオカ芋、またはキヤツサバ芋などをいう。有毒なものと無毒なものがある。両方とも製粉法がちがうだけで食用にする。米食が普及しない前は「ブラジルのパン」といわれたほど主食の一部をなしていた。

サンパウロ州では、毒のないほうを好み、これをマンジオカ・ドーセまたはアイピン、アイピーなどという。芋は煮ても食べる。北方や海岸地帯では、毒のあるほうを主に粉にする。サンパウロ州では、これをマンジオカ・ブラーバというが、北方では単にマンジオカという。そして毒のないほうをマカシェーラとよぶ。

有毒のほうは芋を煮て食べるわけにいかないから、マカシェーラのほうを煮て食べる。

ミル・レイス (Millerreis)　むかしの通貨の単位で、一、〇〇〇レール(レイスは複数形)のことであるが、日本移民は"ミル"と略して用いていた。その後名称がクルゼイロに変わり、いまはノーボ・クルゼイロとなった。クルゼイロ以下はセンターボである。現在(一九六九年一月)ドルが四・四〇ノーボ・クルゼイロである。

パルミット (Palmito)　椰子の芯(葉のつけ根の内部)の総称でもあるが、パルミットとよばれる、特別に芯を食用にする種類の椰子(Euterpe edulis Mart)がある。海岸地帯(レジストロ、桂、セツテ・バーラス、ジュキア線等)ではジュサーラ(Jucara)とよぶ。ただし、その芯は、やはりパルミットである。この椰子は芯を食用にするばかりでなく、幹は建築用

として初期の植民者たちに盛んに利用された。

なおジュサーラは、北部のマラニオン州においては、パラ州のアサイー（Euterpe Oleracea Mart）の別名であるが、おそらくパルミットに近い品種の椰子であろう。

パトリモーニオ（Patrimônio）市街地、町などと訳している。新開地で、土地を売りだすときに、計画的につくる市街地のことである。もとはサント（聖者）に寄進した土地＝財産という意味であった。「地方都市の出現と発展」の（注）を参照。

さびる 日本語である。コーヒーその他の穀物を篩にかけて、あおること、ブラジルの日本人は「さびる」という言葉を使っている。日本の地方語であろう。

植民地と植民者 植民地については、第3部、第4部などを参照されたい。植民者というのは、自作農集団地（植民地）の人という意味である。植民といわずに植民者といふならわしている。そして、植民地にはいることを入植といふ、はいる人を入植者といっている。

テラ・ローシャ（Terraxa） 紫色土という

意味であるが、イタリア語の赤土という言葉がなまったものだという説もある。紫赤土といたらいいだろう。玄武岩が風化してできた土壌であって、コーヒーの適地とされている。

バガブンド (Vagabundo) 放浪者、なまけもの、無頼漢などのことを、バガブンドとっている。農業移民として渡来し、農業を放棄して都会にでる独身青年をバガブンドとって蔑視した。

椰子の木 (Coqueiro) 椰子の木といえば、日本の人はすぐにココ椰子の木を想像するだろう。ここでいう椰子の木は、サンパウロ州に多いもので、工業用に実や幹を供給しない(あるいは利用されていない)ので、単にコツケイロ(椰子の木)とよんでいるだけで、俗名もあまり知られていない。ぶどう粒ほどの小さい黄色な実が房になってなる椰子の木で、子供たちはその実(コツキーニョ)の外側の果肉をよろこんで食べる。むろんなかにはかたい実(さね)があるのであるが、外側は筋ばつていて、かむと、ねちやねちやするが、甘くておいしい。幹はまっすぐでなかなか腐らないので家の壁や屋根や豚小屋の囲いに使う。芯も少ないが食べられる。

少しあくがつよい。われわれには忘れることのできな

い有用な椰子の木である。



この椰子の俗名、学名をぜひ知りたいたいと思っ
ていろいろな本をあさってみたが、あまり身近な
もので、いまでは実用から遠ざかっている
ためにさがしにくかった。ついに農務局管轄
の植物研究所をおとずれ、生物学研究主任の
エドアルド・クーン Edoardo Kuhn 氏に教
えを乞うた。俗名をジェリバー (Jeriba, jeriva,
babadeboi, palmito amargoso)、あるいは
一般にコツケイロとよばれているもので、学
名は *Arecastrum Romanzoffianum* (Cham.
Becc.) というのであった

(ある本にはC o o c o s R o m a n z o f f i a n aと
も記してある)。

このほかに、植民者が建築やその他の用材とした椰子の木を二種類ほどあげてもらったが、ここには略する。クーン氏はコロニアの植物学者橋本梧郎氏とも懇意でドイツ人二世であり、父君はノロエステ鉄道敷設の技師であつたという。奇しき因縁である。

参 考 文 献

編・著者(*は編、**は編著) ありあき移住地十年史刊行会*	書・論文名 「創設十年」	刊行所 信濃海外協会	刊行年 一九三六
アンドウゼンバチ**	「コチア産業組合三十年の歩み」	サンパウロ	一九五九
アンドウゼンバチ	「近代移民の社会的性格」 サンパウロ人文科学研究所「研究レポートI」	サンパウロ	一九六六
同 右	「日本移民の社会史的研究」 サンパウロ人文科学研究所「研究レポートII」	オリオン社	一九六七
青柳淳郎*	「明治九十九年」	松沢書店	一九六五
入江寅次	「ブラジル移民五十年」	白楊社	一九五八
岩崎昶	「世界映画史」	中央公論社	一九五〇
今井清一	「大正デモクラシー」(日本歴史一三三)	非売品	一九六七
牛窪襄	「宅地王・上利新吉」	中央公論社	一九五八
大内力	「ファシズムへの道」(日本歴史一二四)	中央公論社	一九六七
小野真禪	「ブラジルに於ける第一線に活躍する人々」	サンパウロ	一九四〇
児玉正一	「ブラジル移民の父・上塚周平」	〃	一九五〇
香山六郎**	「移民四十年史」	〃	一九四九
在伯日本人文化協会*	「伯国憲法審議会に於ける日本移民排斥問題の経過」	在伯日本人文化協会	一九三四
斎藤宏志	「ブラジルの日本人」	丸善株式会社	一九六〇
サンパウロ新聞社*	「コロニア戦後十五年史」	サンパウロ	一九六〇

鈴木貞次郎	「ブラジル日本移民の草分け」	神戸日伯協会	一九三三
同 右	「埋れ行く拓人の足跡」	サンパウロ	一九四一
聖州新報社*	「のろえすて年鑑」	パウルー	一九二八
同 右	「在伯日本移民廿五周年記念鑑」	々	一九三三
世界の歴史編集委員会*	「世界の歴史―日本」	毎日新聞社	一九四九
高岡 専太郎	「ブラジルの家庭医書」	サンパウロ	一九三九
高岡 熊雄	「ブラジル移民の研究」	宝文館	一九二五
田中 誠之助	「邦人活躍のブラジル」	鹿見島・新生社	一九二八
チエテ自治会*	「チエテ十年史」	サンパウロ	一九三八
刀身会同人*	「潑刺」第一六号	々	一九四六
トレス・パラス青年連盟*	「トレス・パラス移住地」	帝国書院	一九六〇
永田 稠	「南米日本人写真帖」	日本力行会	一九二一
中西 周甫	「北パラナ国際植民地開拓十五周年史」	サンパウロ	一九五〇
日本移民五十年祭委員会*	「かさと丸」	々	一九五八
同 右	「物故先駆者列伝」	々	一九五八
日本人同志会*	「日伯新聞社主三浦鑿の処分歎願書」	非売品	一九二九
農事通信社	「農業のブラジル」九月号	サンパウロ	一九二八
パラナ新聞社*	「パラナ年鑑」	ロンドリーナ	一九六五
同 右	同 右	々	一九六六
同 右	同 右	々	一九六七
同 右	同 右	々	一九六八
パウリスタ新聞社*	「コロニア戦後十年史」	サンパウロ	一九五六

パウリスタ新聞社*	「コロニア五十年の歩み」	サンパウロ	一九五八
同 右	「コロニア産業地図」	々	一九六二
平野植民地日本人会*	「平野廿五周年史」	カフェランジア	一九四一
ブラジルに於ける日本人発展史刊 行委員会*	「ブラジルに於ける日本人発展史」上・下	ラテン・アメリカ協会	一九四一
伯刺西爾時報社*	「伯刺西爾年鑑」	サンパウロ	一九三三
汎アラサツバ日本人会*	「アラサツバ五十年史」	アラサツバ	一九五八
ブラジル日系人実態調査委員会*	「ブラジルの日本移民」資料篇、記述篇	東大出版会	一九六四
橋本 梧郎	「ブラジル植物記」	帝国書院	一九六一
本間 剛夫	「望郷」(創作)	宝文館	一九五一
松岡 冬樹	「拓人闘病法」	日本植民通信社	一九三二
水野 昌之	「バストス二十五年史」	サンパウロ	一九五五
山田 揚之助	「ブラジルを直視して」	海外興業株式会社	一九二九
八重野 松男	「今日のブラジル」	ジャパン・タイムス	一九二九
よみもの社	「よみもの」第三巻・第五号(四月二十日)	サンパウロ	一九五〇
レジストロ植民地開設五十年祭 典実行委員会*	「レジストロ都現勢概観」	レジストロ	一九六三
輪湖 俊午郎	「パウルー管内の邦人」	サンパウロ	一九三九
Azevedo, Aroldo de	「Regiões e Paisagens do Brasil, serie Brasileira vol. 274	S. Paulo	1954
Anaral, Luiz	「Aspectos fundamentais da vida rural Brasileira」	S. Paulo	1936

Ellis Junior, Alfredo	"A Evolução da Economia Paulista e suas causas", <i>serie Brasileira</i> 90	S. Paulo	1937
Mello, Jorge	<i>A Terra do Café</i>	S. Paulo	1919
Midorikawa, Jorge T.	"As colonias japonezas na Zona do Ribeira de Iguaçu"	S. Paulo	1928
Millet, Sergio	"Roteiro do Café", BIPA Ed.	S. Paulo	1946
Monbeig, Pierre	"O Brasil", <i>Dif. Eur. de Livros</i>	S. Paulo	1958
Müller, N. L.	"Sítios e Sítiantes no Estado de S. Paulo", F. F. C. L. da V. S. P. <i>Boletim</i> 132	S. Paulo	1951
Neves, Herculano	"O Processo de Shindo Remmei"	S. Paulo	1960
Nardy Filho, Francisco	"A cidade de Itá", 1 ^o vol.	S. Paulo	1928
Pacheco, Renato José Costa	"Antologia do Jogo de Bicho", <i>Org. Si-mões Ed.</i>	S. Paulo	1957
Prads Junior, Caio	"Evolução Política do Brasil e outros Estudos", <i>Ed. Brasiliense</i>	S. Paulo	1953
Prads Junior, Caio	"Historia Economica do Brasil", <i>Ed. Brasiliense</i>	S. Paulo	1949
Pereira da Silva, Gastão	"Serrador, o creador da Cinelandia"	Rio de Janeiro	
Ramos, Augusto	"O Café"	S. Paulo	1925
Sampaio, A. J. de	"Alimentação Sertaneja e do Interior da Amazonia", <i>serie Brasileira</i> , vol. 238	S. Paulo	1944

著者略歴

1906年生まれ 本籍地栃木県。
1917年契約移民として父母とともに来伯
1921年まで珈琲農場、開拓地にて過ごす。
1928よりサンパウロ市で絵の修行をはじめ。
1935年サンパウロ美術学校卒業、この年、仲間とともに
サンパウロ美術研究会（略称 聖美会）を創立。以後幹部と
してとどまっていたが1969年後輩に席を譲る。
1967年より「移民の生活の歴史」を執筆。1969年脱稿。

移民の生活の歴史
ブラジル日系人の歩んだ道

1970年6月20日発行

著者 半田知雄（はんだともお）
発行者 中尾熊喜

製作所 団法人家の光協会
発行所 サンプアウロ人文科学研究所
印刷所 株式会社桜井廣濟堂
製本所 寿製本株式会社

定価 1、500円